

(2) 石器

尖頭器・尖頭器未製品(第65～88・90図 第20～22表 写真図版38・39)

298～318・320～324は尖頭器及びその未製品である。石材はガラス質黒色安山岩やホルンフェルス、黒曜石等が使用されている。このうち縄文時代草創期のものと考えられるのは298～318で、1区A P・A Q 36・37グリッド及び2区A I・A J 31グリッド付近に散見される。一方、縄文時代早期以降と思しき尖頭器の出土位置は2区に限定される。

298・299は出土した尖頭器の中でも大型である。両者ともに木葉形尖頭器で、石材はガラス質黒色安山岩である。298の計測値は最大長11.2cm、最大幅3.2cm、最大厚1.1cmを測る。全体の形状を整えた後に、縁辺に細かな剥離調整を行っている。299の計測値は最大長9.8cm、最大幅4.4cm、最大厚1.0cmを測る。基部は平基で、折損後に剥離調整による再加工を行ったものか。先端部は298と比較しても丸い仕上がりである。

300～318も尖頭器であるが、小型である。300はホルンフェルスを石材とし、部分調整が施されている。片面先端部付近の側縁に細かな剥離が見られる。基部には打面が残置する。裏面には打瘤と打瘤裂痕が観察できる。当該資料は未製品である可能性も持つ。301～305は折損資料である。全てホルンフェルスを石材とし、いずれも風化が進み、貝殻状裂痕が判然としない資料もある。301は基部が残存したものと考えられる。両面が調整されている。302・303は基部が、304・305は先端部が失われたものと考えられる。305は基部左縁がやや大きめの剥離により、肩部が仕上げられている。

306は尖頭器の未製品か。神津島恩馳島産黒曜石を石材とする。先端部から基部に向かう側縁片側には細かい剥離調整を施している。裏面は主要剥離痕が残る。形状から尖頭器の未製品と判断したが、時期は早期代まで下る可能性を持つ。

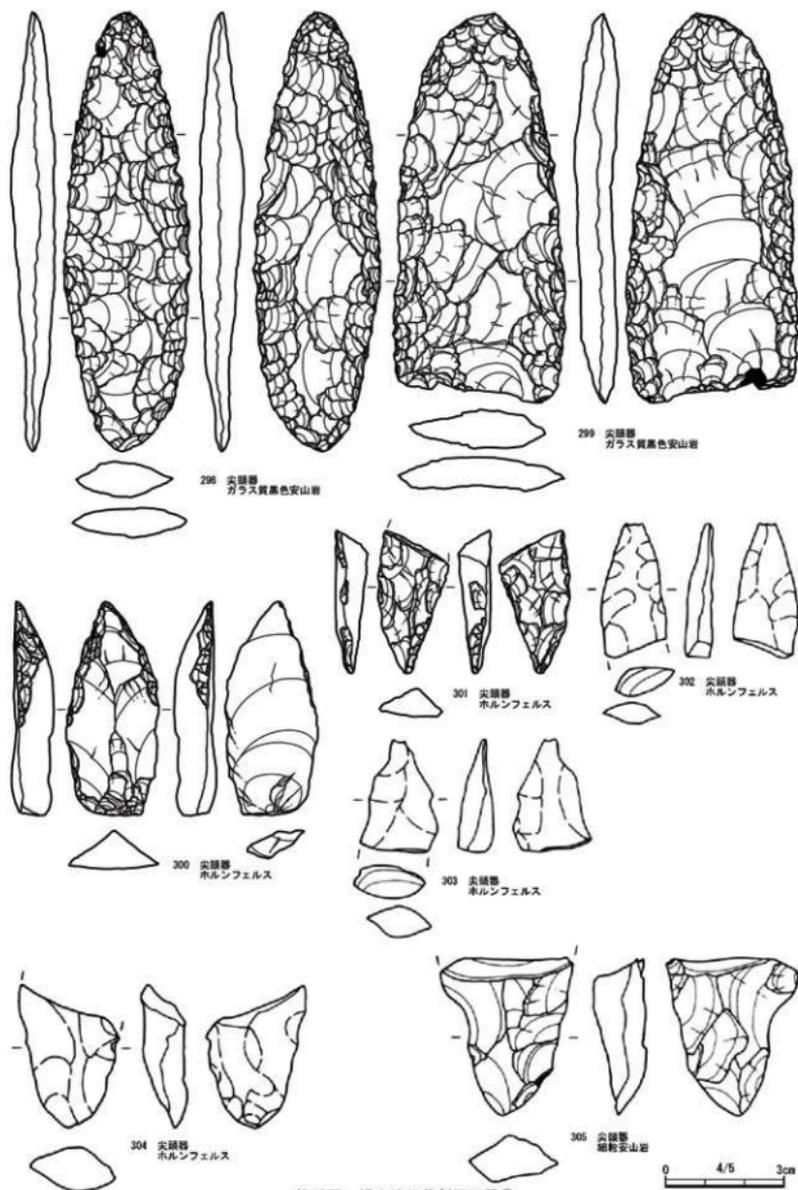
307～317は有舌尖頭器である。そのうち307・308は身部と茎部の境界が屈曲し、平基状を呈し、共に丁寧に仕上げられた資料である。307はホルンフェルスを石材とし、その計測値は最大長7.2cm、最大幅2.0cm、最大厚0.7cmを測る。先端部は鋭く仕上げられている。308はガラス質黒色安山岩を石材とし、その計測値は最大長6.2cm、最大幅1.5cm、最大厚0.7cmを測る。両側縁は微細な剥離を連続して施されたため、細かな鋸歯状を呈する。309もガラス質黒色安山岩を石材とする。308よりも短小で、両側縁中位付近に微かな膨らみを持つ片面調整の資料である。

310はホルンフェルスを石材とする。全体的に風化が進む。身部と茎部の境界は屈曲し、凸基状を呈している。

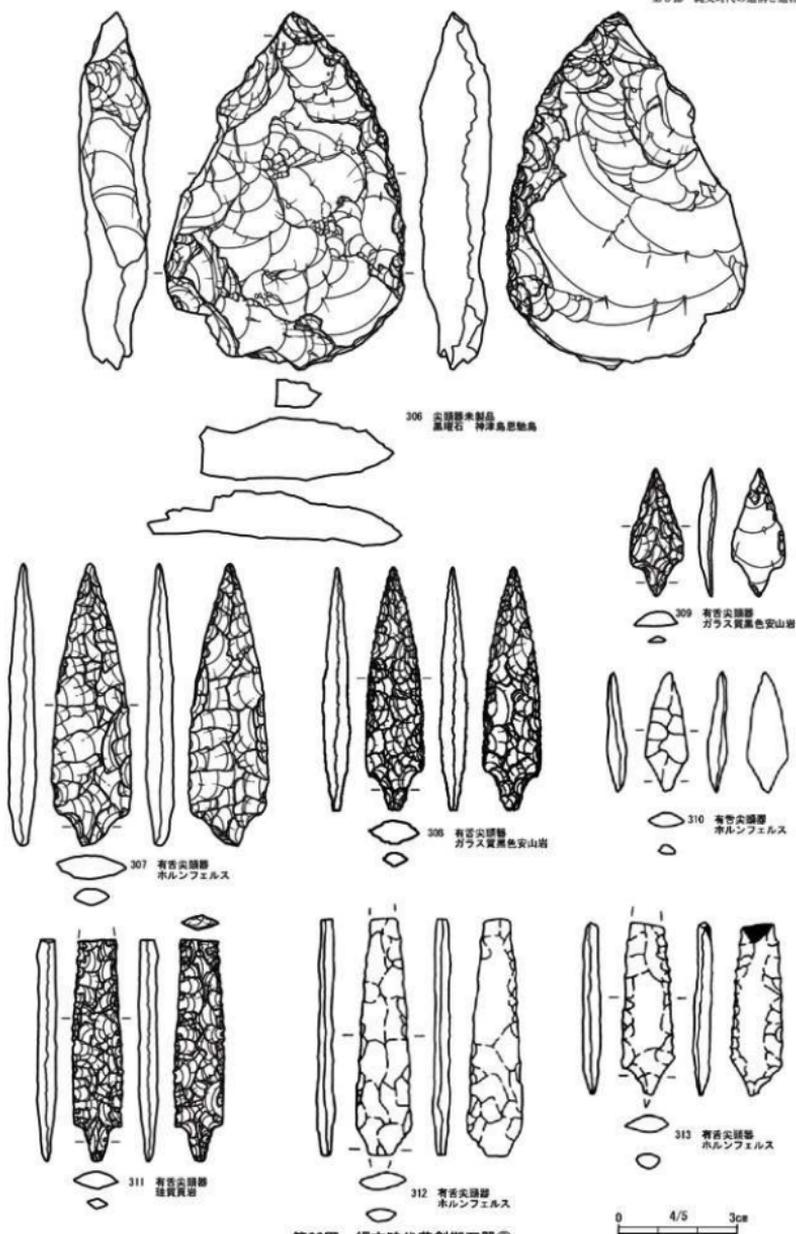
311～313は両側縁がほぼ平行する資料で、いずれも先端部を折損した資料である。311は珪質頁岩を石材とする。両面とも丁寧に剥離調整を施している。両側縁は微細な剥離を連続して施されたため、細かな鋸歯状を呈する。身部と茎部の境界が屈曲し、平基状を呈する資料である。312・313は2点ともホルンフェルスを石材とし、全体的に風化が進む。身部と茎部の境界が屈曲し、凸基状を呈する資料である。313は311・312と比較して、やや小型である。

314はガラス質黒色安山岩を石材とする。茎部と先端部が失われた資料で、身部は狭長な三角形であるが、307・308と比較して小型の尖頭器である。315も小型の尖頭器である。天城峠産黒曜石を石材とする。身部は二等辺三角形を呈し、茎部は折損している。有茎石鐮の可能性も想起されたが、尖頭器として報告する。316・317はホルンフェルスを石材とする尖頭器であるが、全体的に風化が進み、先端部が折損している。

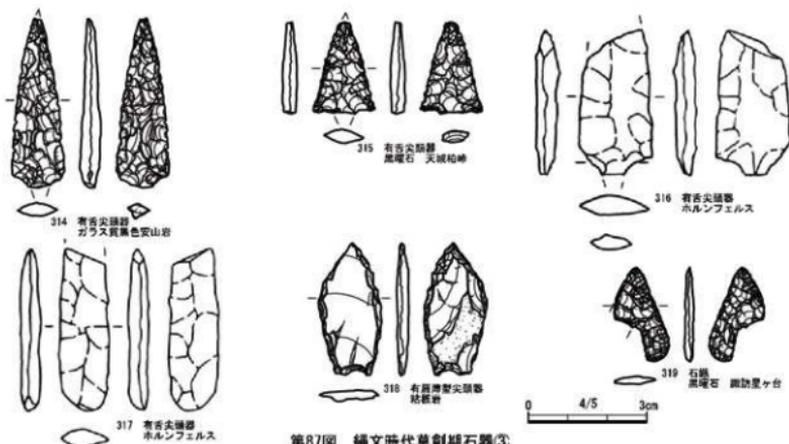
318も尖頭器として分類した資料である。石材は粘板岩で、劈開に沿って薄く割れ剥がれる性質を利用して。自然面と素材剥片の剥離面が残置し、側縁には細かな剥離を施して形状を整えるのみの、縁部調整が観察される。身部中位付近がやや張り出すため、有肩尖頭器と細分が可能か。



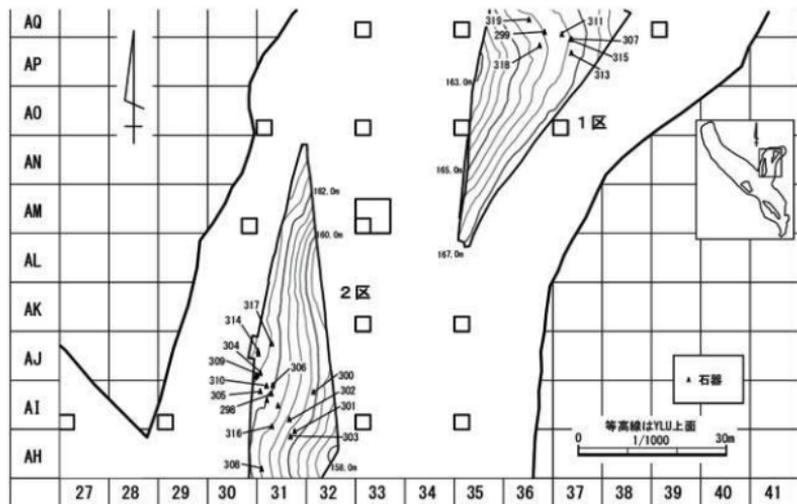
第85図 縄文時代草創期石器①



第86図 縄文時代草創期石器②



第87図 縄文時代草創期石器③



第88図 縄文時代草創期石器分布図

第20表 縄文時代草創期石器組成表

		尖頭器	有舌尖頭器	有舌尖頭器	尖頭器	有舌尖頭器	石鏃	計
天城結晶	AGT				1			1
神津島黒軸島	KZOB		1					1
諏訪見ヶ台	SHD					1	1	1
黒曜石計					1	1		3
ガラス質黒色安山岩	GAn	4	1		3			7
細粒安山岩	FAn	1						1
ホルンフェルス	Hor					6		13
珪質頁岩	SSh					1		1
粘板岩	Sl			1				1
計		12	1	1	11	1		26

320～324は縄文時代早期以降のものとして推定された尖頭器及び未製品である。そのうち320～322は両面調整の尖頭器である。320は神津島恩馳島産黒曜石を石材とし、身部は木葉形を呈する。基部は無い。321は諏訪星ヶ台産黒曜石を石材とする。322は和田小深沢産黒曜石を石材とする。基部が失われ、身部中位付近で最大幅を測る。323・324は尖頭器の未製品に分類された資料である。323は横長剥片を利用し、縁辺に剥離調整を施したもののか。大ききから尖頭器の未製品と考えたが、石材とする細粒砂岩が尖頭器に使用される一般的な石材とは考えられないため、検討を要する。324は神津島恩馳島産黒曜石を石材とする。

石鏃・石鏃未製品(第87～89・91・93・94図 第20～22表 写真図版38・39)

319・325～357は石鏃である。これらのうち319については草創期の可能性があるものとして分類したが、それ以外の石鏃は早期以降として分類している。この石器は基部の有無及び基部の形態により分類が可能である。出土位置は2区A H～A J 30～32グリッドに集中する。

325・326は凹基有茎鏃である。両者とも黒曜石で前者が天城柏峠産、後者は諏訪星ヶ台産を石材とする。両者とも両側縁部中位付近が微かに内湾する。326は脚部及び基部が折損している。

327～357は無茎鏃で、石鏃の大半を占めている。その無茎鏃は凹基と平基に分類可能である。319・327～354は凹基無茎鏃で、挟りが逆「V」字状に入る資料が319・327～336・350～354で、全て黒曜石を石材とする。草創期の可能性がある319は諏訪星ヶ台産黒曜石を石材とし、片方の脚部が折損している。小型である327・328は鏃身が正三角形状である。329は素材面が残置する。330～336も基部が深く入るタイプで、334は脚部が大いに発達している。

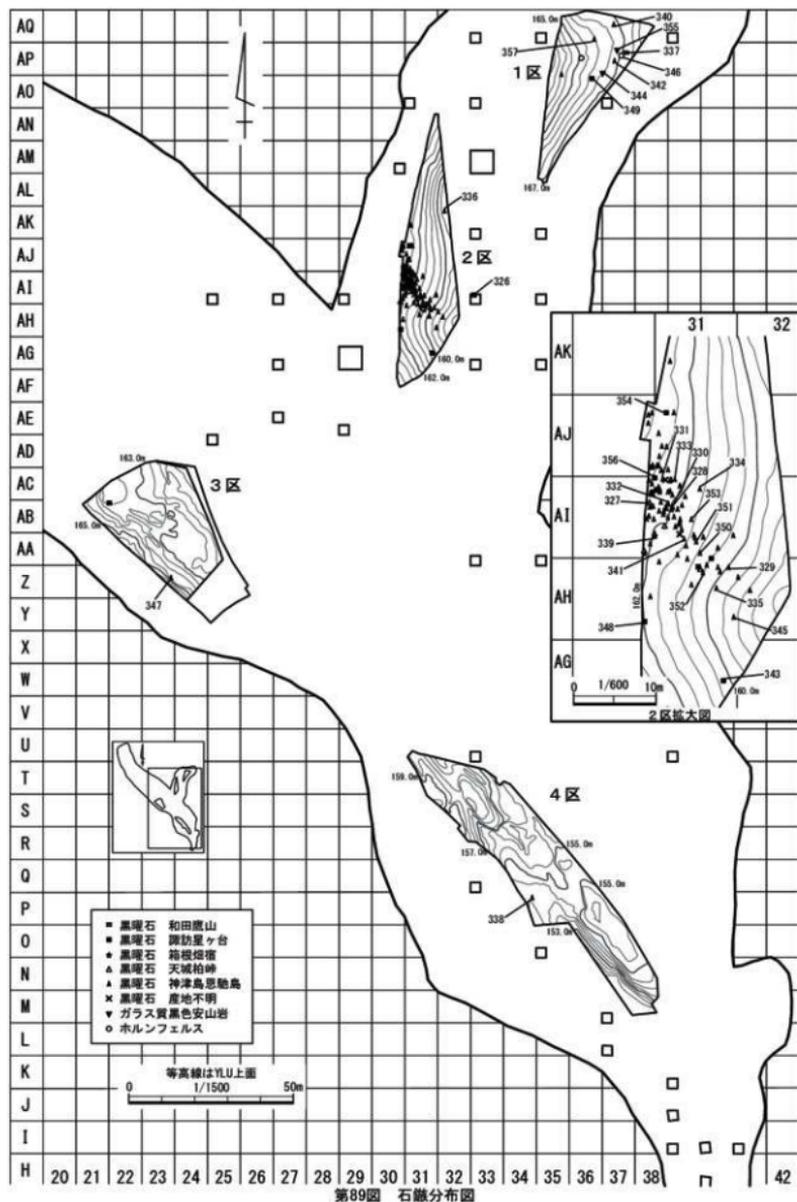
337～349は凹基であるが、前者ほど深く挟りが入らないもので、中には平基に近い資料もある。石材は神津島恩馳島産黒曜石を利用したものが大半である。形状として側縁が直線的に延びるタイプや微かに内湾するために、鏃身全体が丸みを帯びるものも散見される。基部の挟りは半円形、台形状等バリエーションが認められる。石鏃の黒曜石以外の石材としては344がガラス質黒色安山岩、346がホルンフェルスを石材とするのみである。

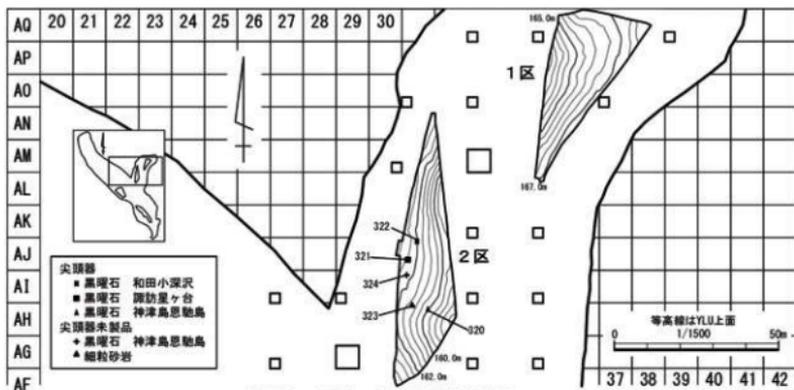
355～357は平基無茎鏃である。355はガラス質黒色安山岩を石材とする。側縁が直線的に延び、全体として二等辺三角形の形状を呈する。356は神津島恩馳島産黒曜石を石材とする。鏃身が内湾するため、やや丸みを帯びる。裏面に素材剥離面が残置する。357は微かに内湾する小型の石鏃である。

358～366は石鏃の未製品か。全体の形状や基部未作出、厚み、細部調整等により未製品か否かを判断している。358はガラス質黒色安山岩を石材とし、素材剥片時の厚みを残す。縁辺から剥離調整を施している。製作途中で折損か。359～361は神津島恩馳島産黒曜石を石材とする。側縁からの細かな剥離調整が行われ、形状を整えつつも製作を放棄か。362・365も神津島恩馳島産黒曜石を石材とする。この資料は浅めの挟りが入れているが、先端部付近が折損している。363はガラス質黒色安山岩を石材とする。基部が折損する。364は諏訪星ヶ台産黒曜石を石材とする。側縁からの細かな剥離調整途中のようである。366は横長剥片を利用したものか。

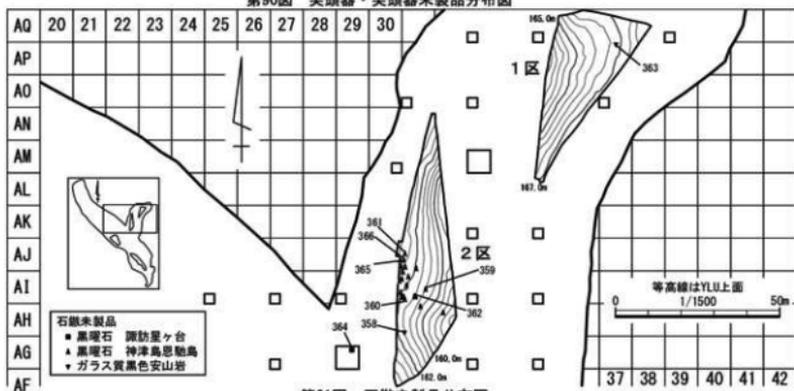
スクレイパー類(第95～97図 第21・22表 写真図版40)

367～381はスクレイパー類に分類した。出土位置は2区に多い。367・368はスクレイパーとした。367は細粒凝灰岩を石材とする。手のひらに入る大きさの自然礫を素材とする。縁辺に細かい剥離調整を施して、刃部を作り出している。石材がスクレイパー類に殆ど使用されない種類で、判断に躊躇する。368は碧玉を石材とする。縦長剥片が素材かと考えられる。両端部が折損しているため全体像が判然とせず、縦長の石匙である可能性も想起される。当該遺跡ではスクレイパー類として報告する。

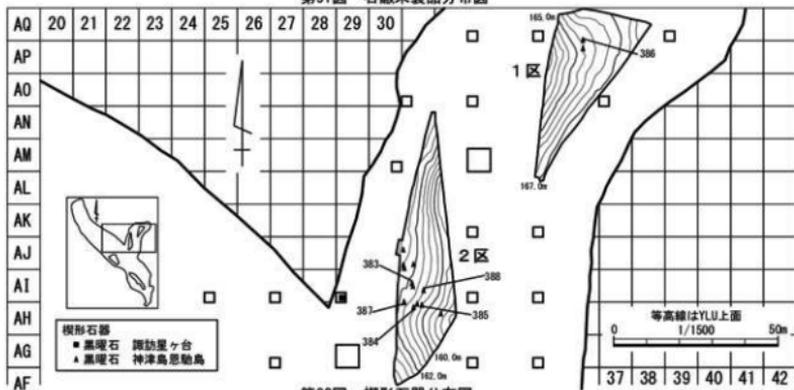




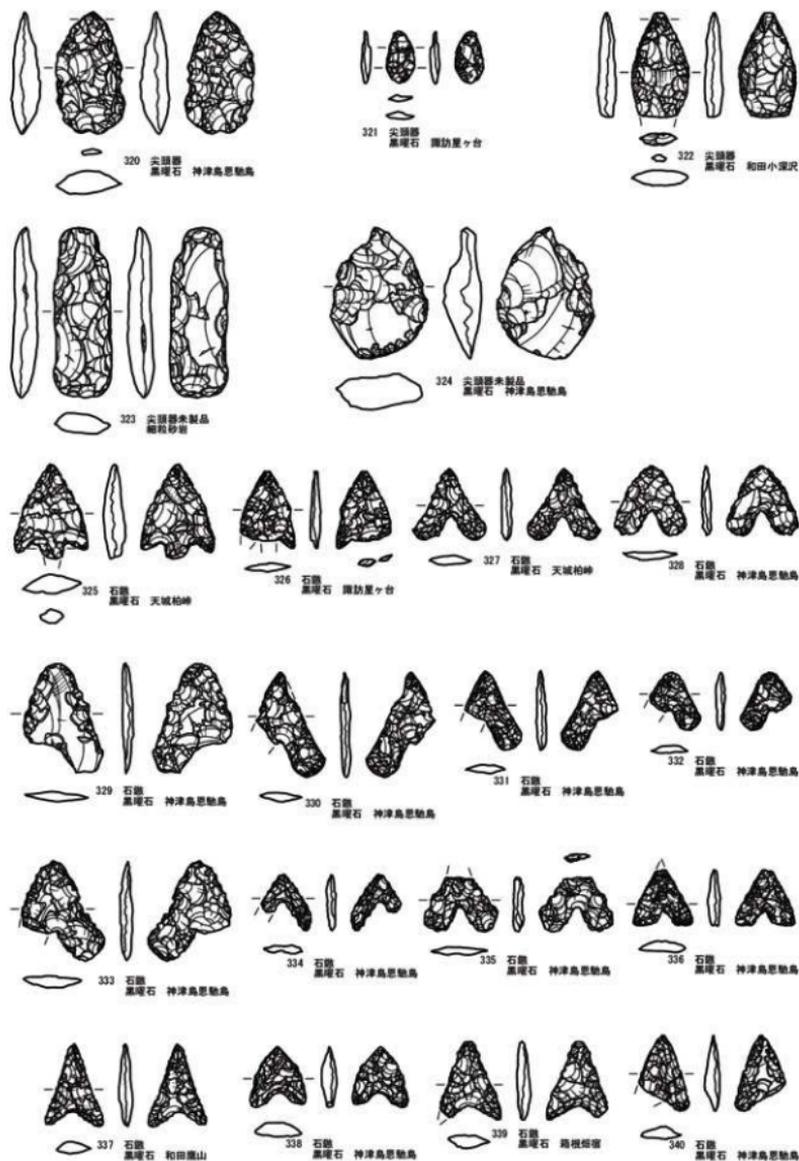
第90図 尖頭器・尖頭器未製品分布図



第91図 石鏃未製品分布図

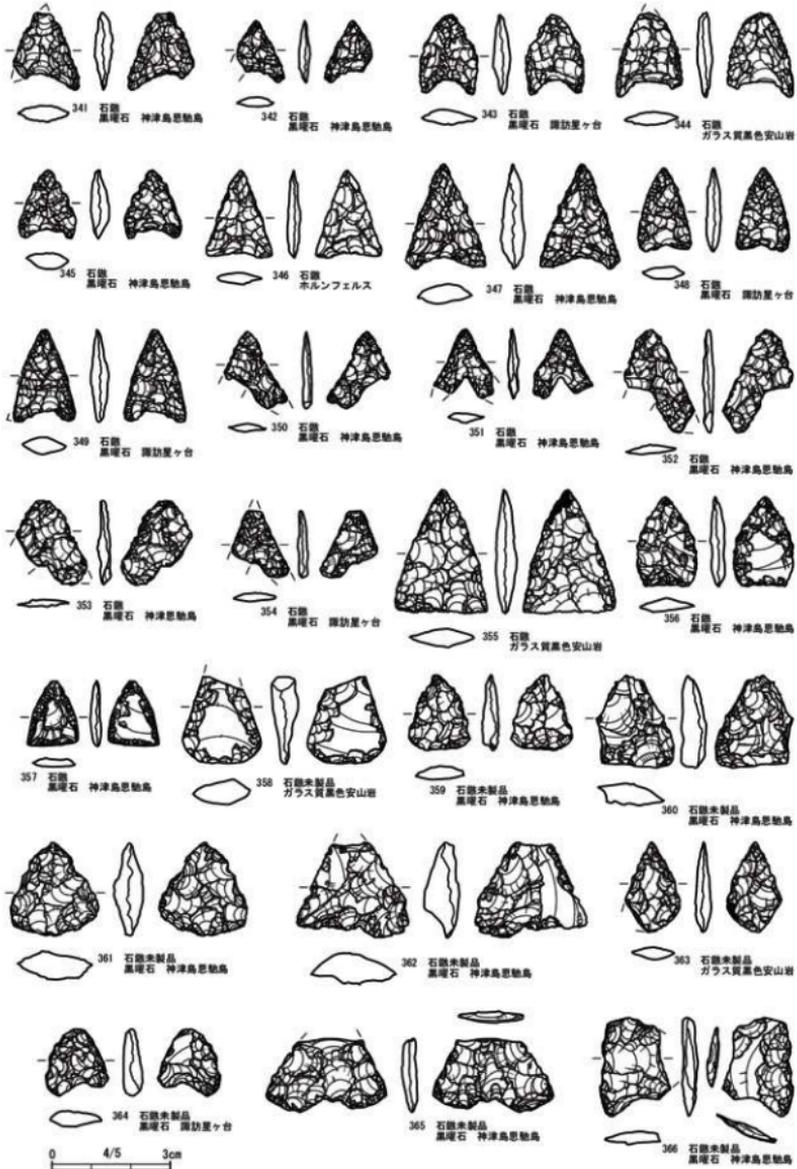


第92図 楔形石器分布図

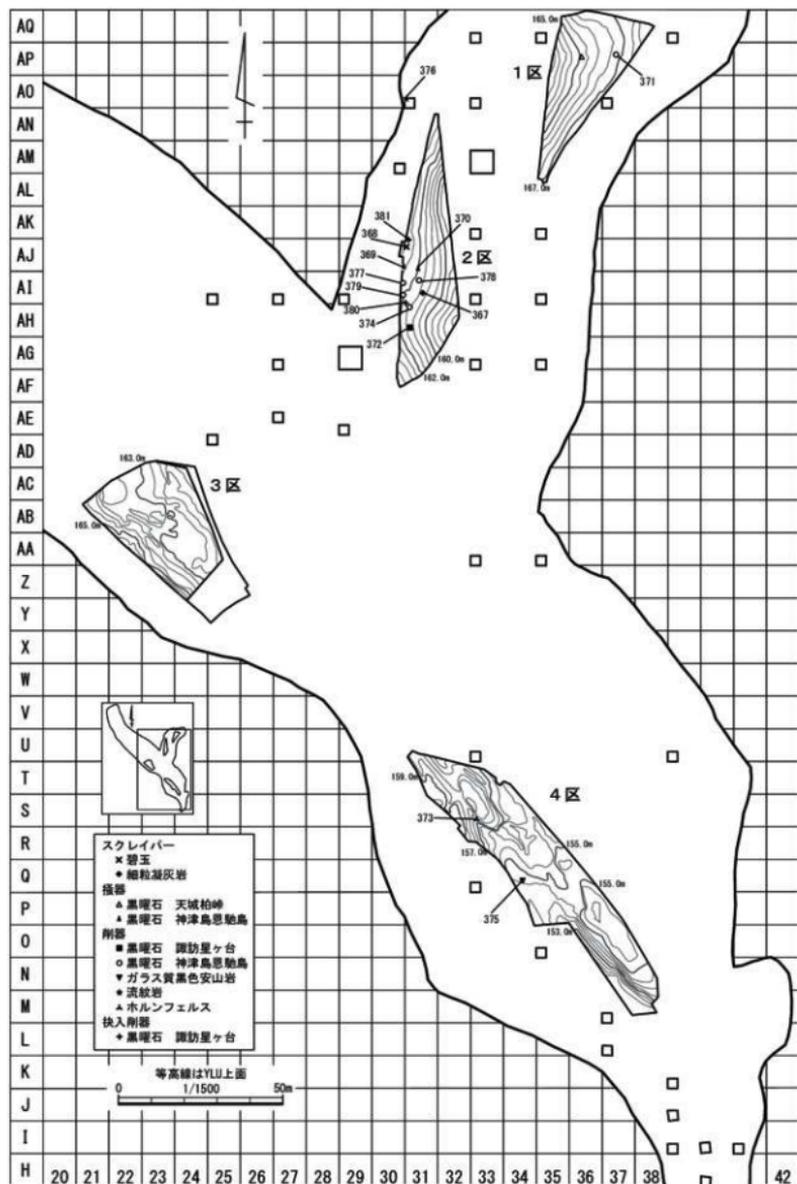


第93圖 尖頭器・尖頭器未製品・石鏃

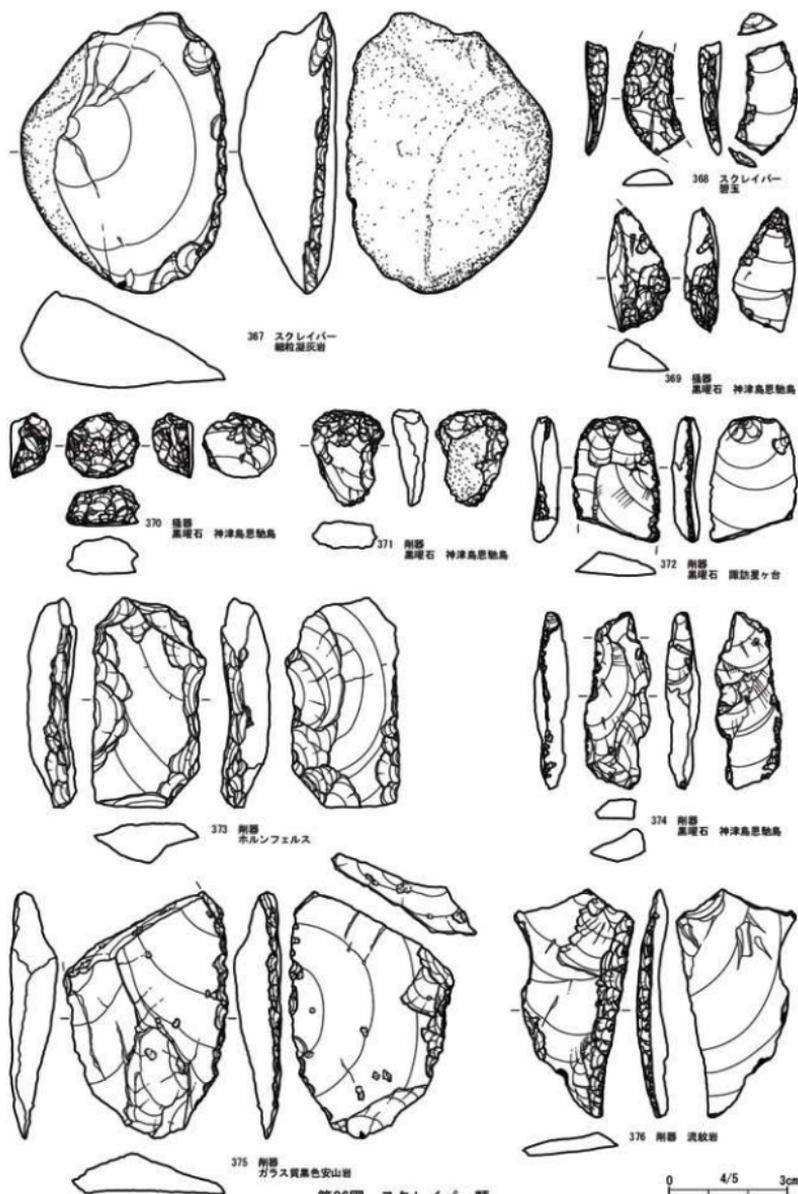
0 4/5 3cm



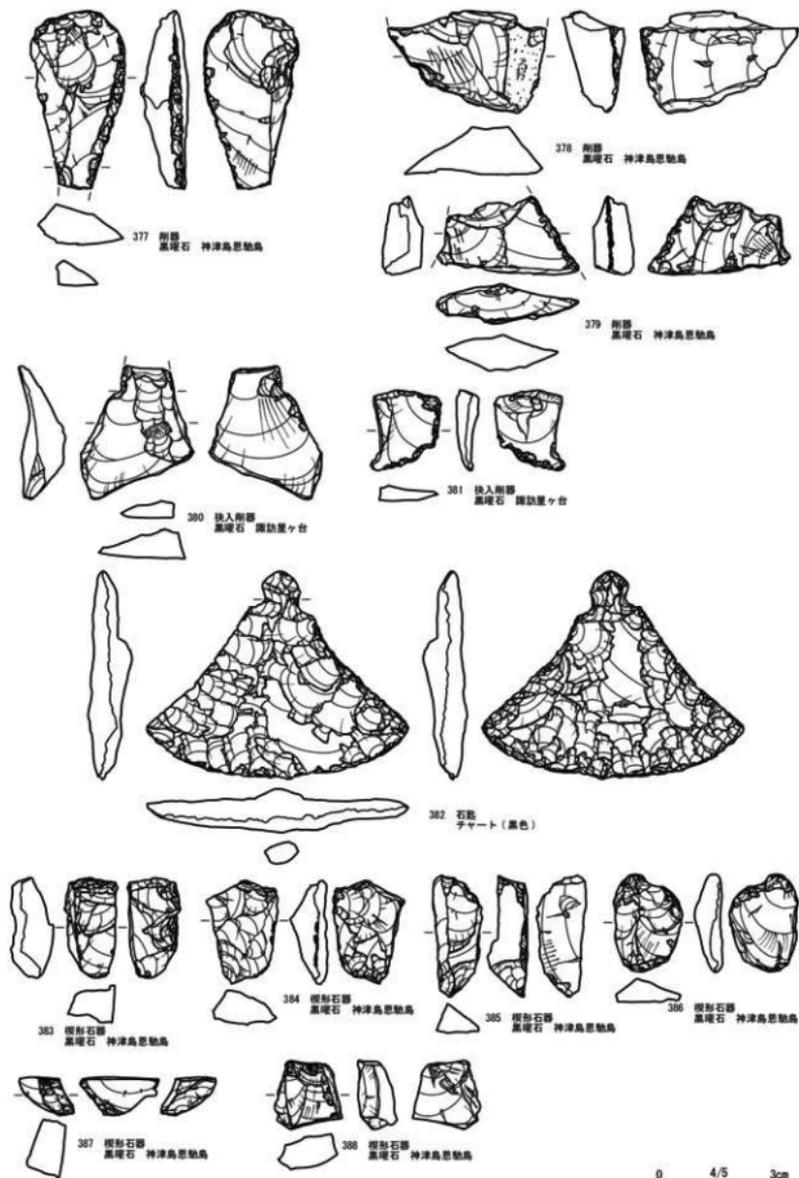
第94図 石鏡・石鏡未製品



第95図 スクレイパー類分布図



第96図 スクレイパー類



第97図 スクレイパー類・石匙・楔形石器

369・370は搔器である。両者共に神津島恩馳島産黒曜石を石材とする。369は左半部が折損している。下端部に刃部が残存する。370は円形搔器であろう。

371～379は削器である。371は神津島恩馳島産黒曜石を石材とする。片面に自然面が残置する。下端部は刃部として加工か。372は諏訪星ヶ台産黒曜石を石材とし、縦長剥片を利用か。打瘤と打瘤裂痕が観察できる。石器の下半部は欠損している。側縁部に細かな剥離調整を施し、刃部に仕上げたものか。373はホルンフェルスを石材とし、横長剥片を利用か。片側側縁を刃部に加工している。374は神津島恩馳島産黒曜石を石材とする。側縁に微細な剥離が連続している。刃部と考えられる。375はガラス質黒色安山岩、376は流紋岩を石材とする。横長剥片か。側縁に剥離を加え、刃部として仕上げている。377は神津島恩馳島産黒曜石を石材とする。下端部が折損している。片側側縁に連続して剥離を加えて、刃部として仕上げている。この剥離は背面側に施されたものであるが、腹面側にも幾つかの微細な剥離が認められる。378・379は共に神津島恩馳島産黒曜石を石材とし、前者は腹面側に剥離調整を施して刃部に仕上げている。後者は両面から剥離調整を施している。

380・381は抉入削器か。諏訪星ヶ台産黒曜石を石材とする。380は上端部側縁に剥離調整を行い、抉り状に仕上げている。

石匙(第97・111図 第21・22表 写真図版40)

石匙として分類した石器は382のみである。チャートを石材とする。重ながらも丸く仕上げられたつまみから、内湾しながら「八」字状に広がる。刃部は半円状である。当該資料はつまみを中軸にした場合、左右対称となるタイプである。表裏面共に剥離調整を行い、丁寧な仕上がりととなっている。刃部に見られる微細な剥離は使用によるものか。

楔形石器(第92・97図 第21・22表 写真図版40)

383～388は楔形石器として考えた。いずれも神津島恩馳島産黒曜石を石材とする。使用時の潰れと考えられる痕跡が384～386で観察される。

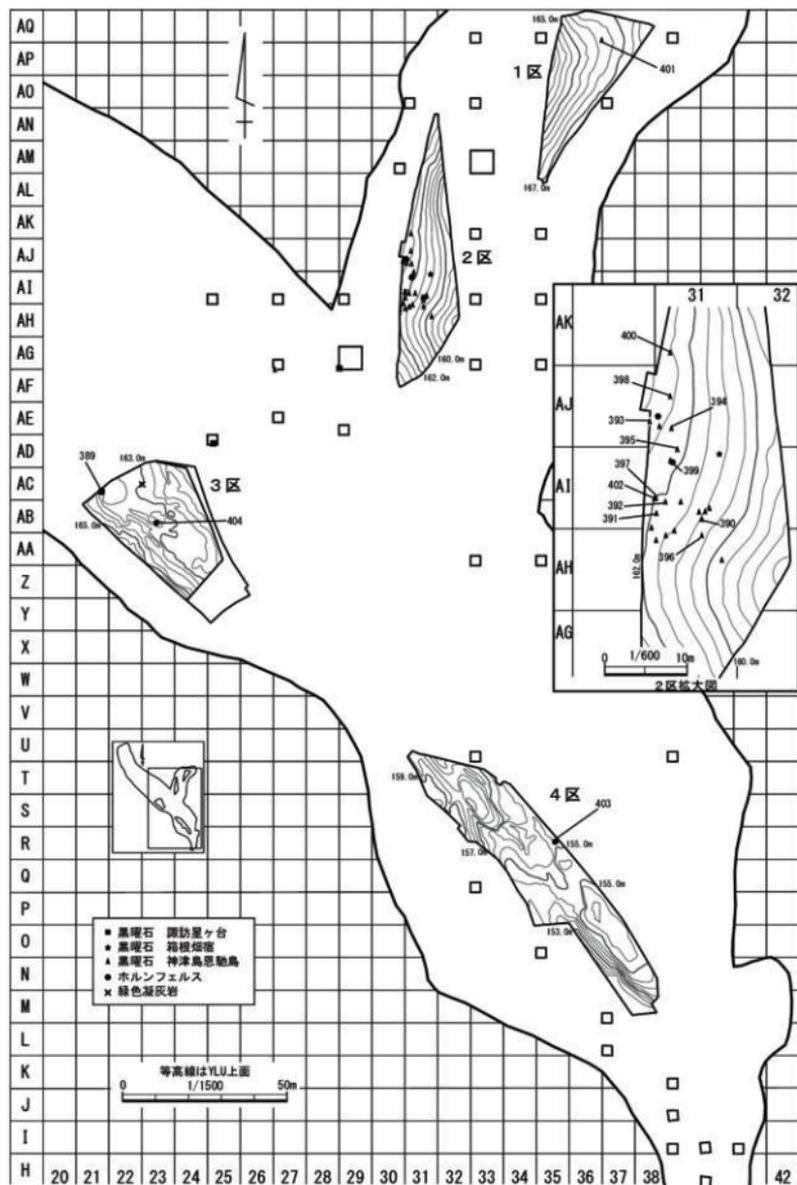
石核(第98・100～102図 第21・22表 写真図版41)

389～404は石核と考えられる。石材は神津島恩馳島産黒曜石が大半を占め、他にも諏訪星ヶ台産黒曜石やホルンフェルスが散見される。

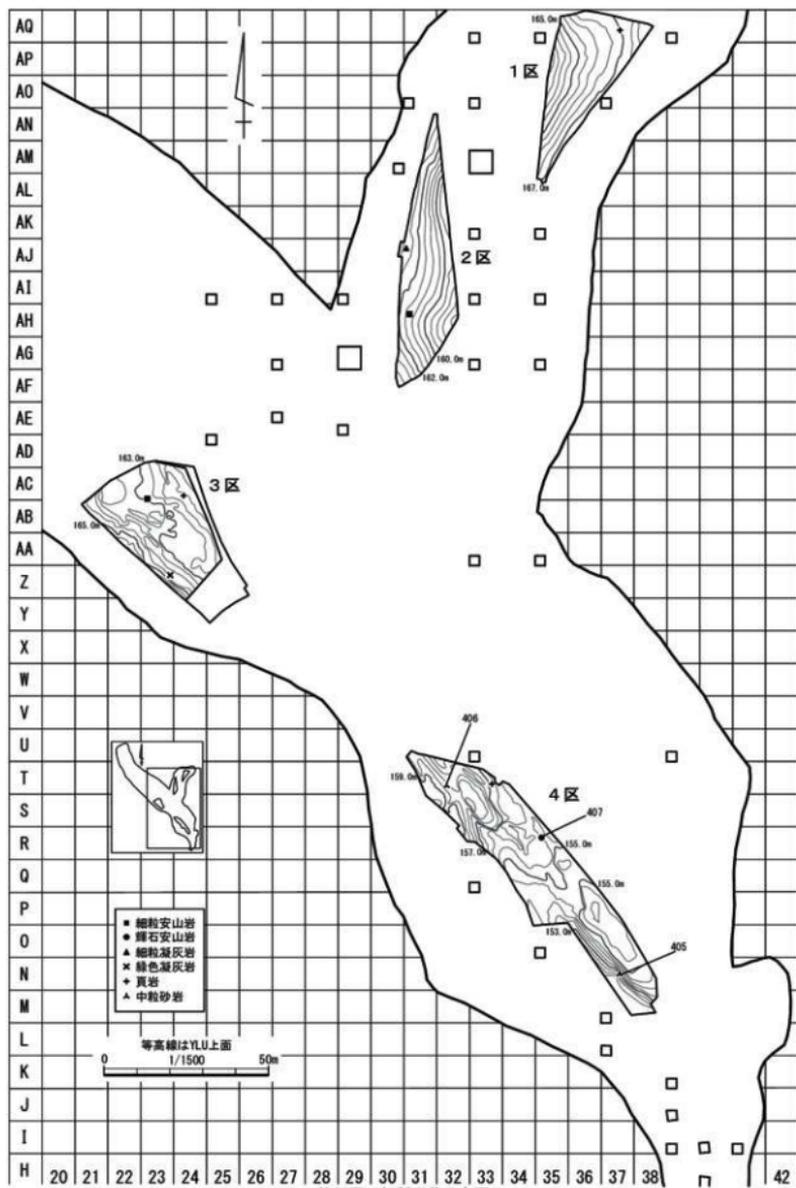
自然礫の形状を残すのが403・404である。共にホルンフェルスで石材とする。403は比較的平坦な面を打面とし、幅の広い横長剥片の剥離を行っている。

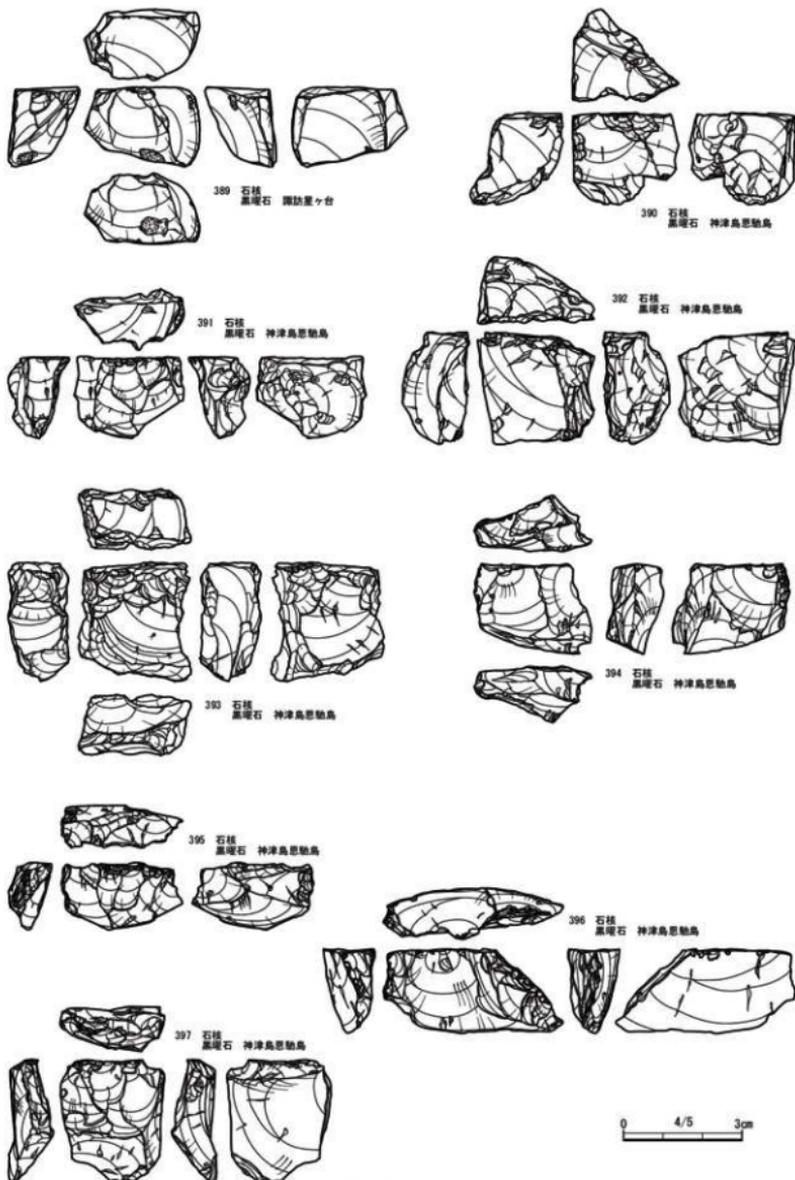
打製石斧(第99・102・103図 第21・22表 写真図版42)

405～407は打製石斧である。当該遺跡出土の打製石斧は11点である。405・406は共に中粒砂岩を石材とする。405は基端部を折損する。刃部側には自然面が残置する。また刃部付近の剥離はやや磨滅気味である。406は基端部及び刃部が折損している。裏面に自然面が残置する。側縁基端部寄りの位置に敲打痕が観察されるが、柄との装着部か。両者とも側縁が並行するので短冊形打製石斧と考えられる。407は前2者の中粒砂岩と異なり、比重が重い輝石安山岩を石材とし、重量は716.7gを測る。また最大幅11.4cmと大型である。両側縁中位からやや基端部寄りの位置に敲打を加え、抉りを入れている。柄との装着部と考えられる。形態から分銅型石斧に分類される。大礫を素材とし、片面には自然面が残置する。刃部付近は使用による磨滅か。

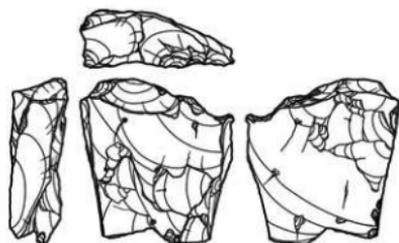


第98図 石核分布図

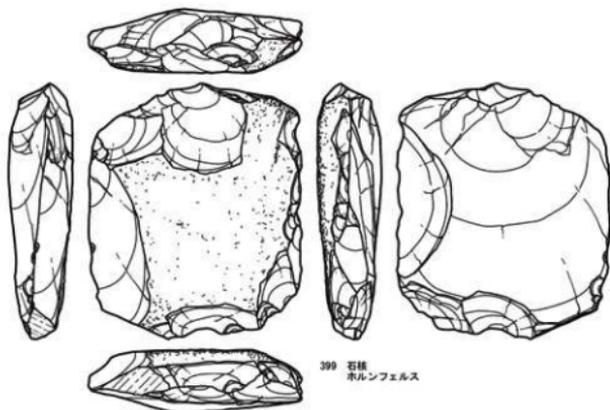




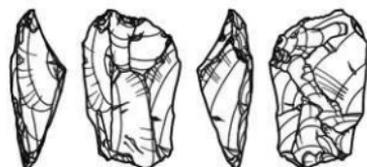
第100図 石核①



398 石核
黒曜石 神津島思馳島



399 石核
ホルンフェルス



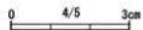
400 石核
黒曜石 神津島思馳島



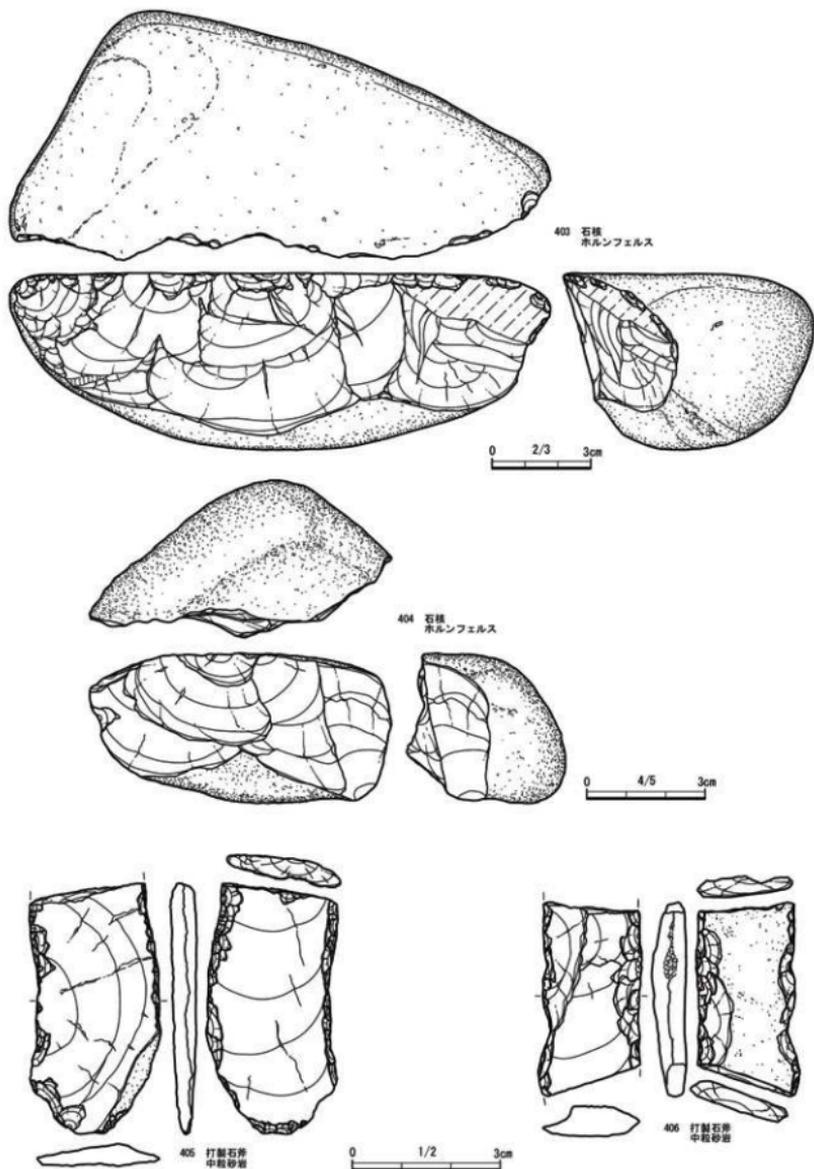
401 石核
黒曜石 神津島思馳島



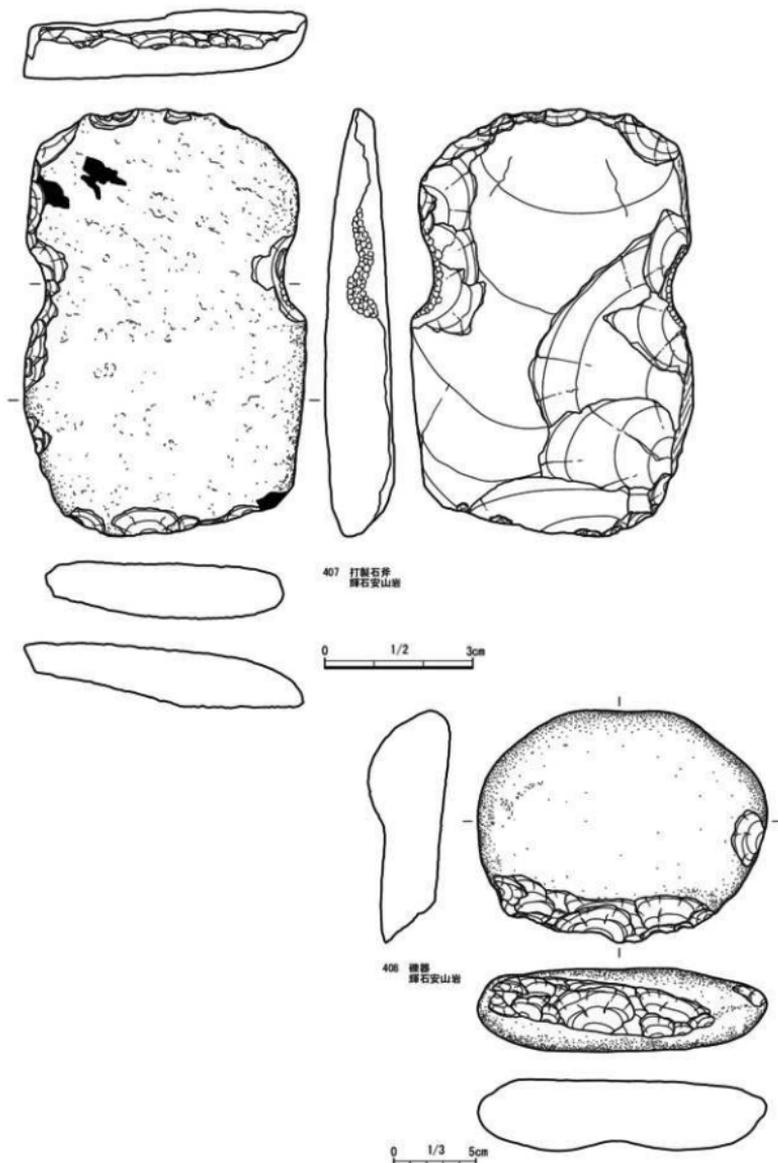
402 石核
黒曜石 神津島思馳島



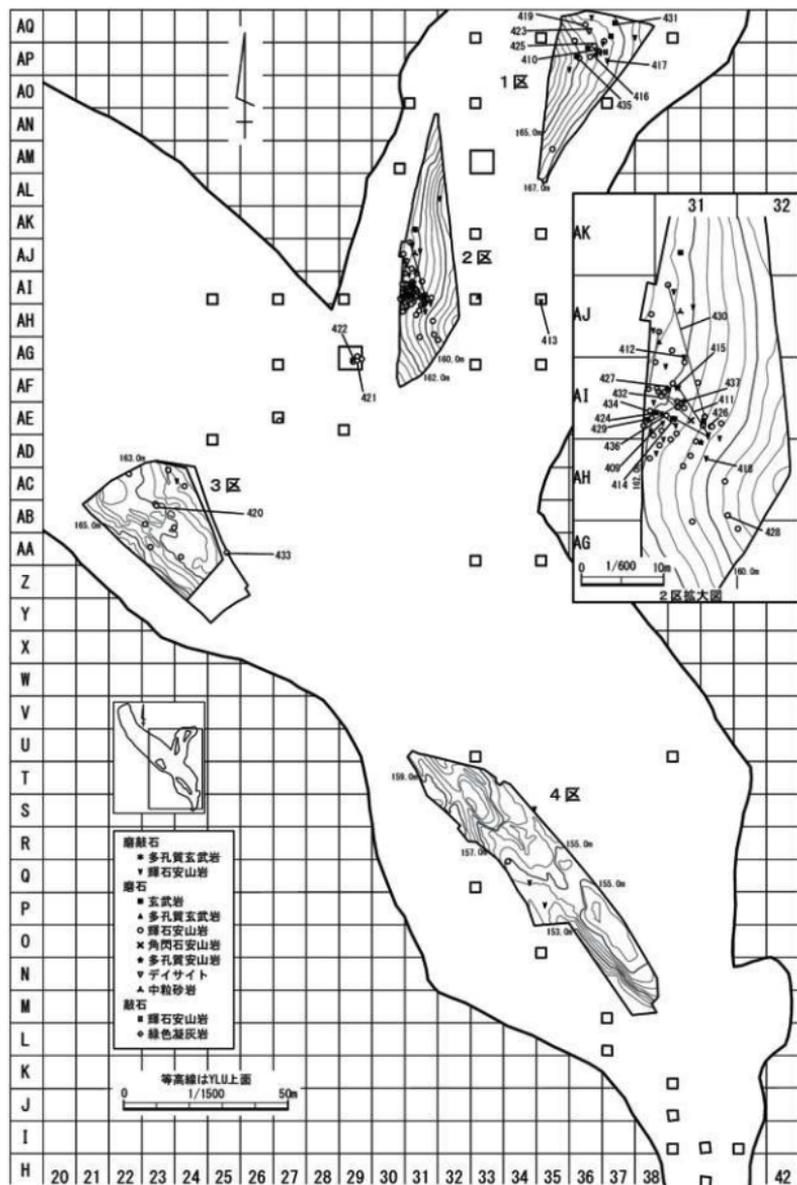
第101図 石核②



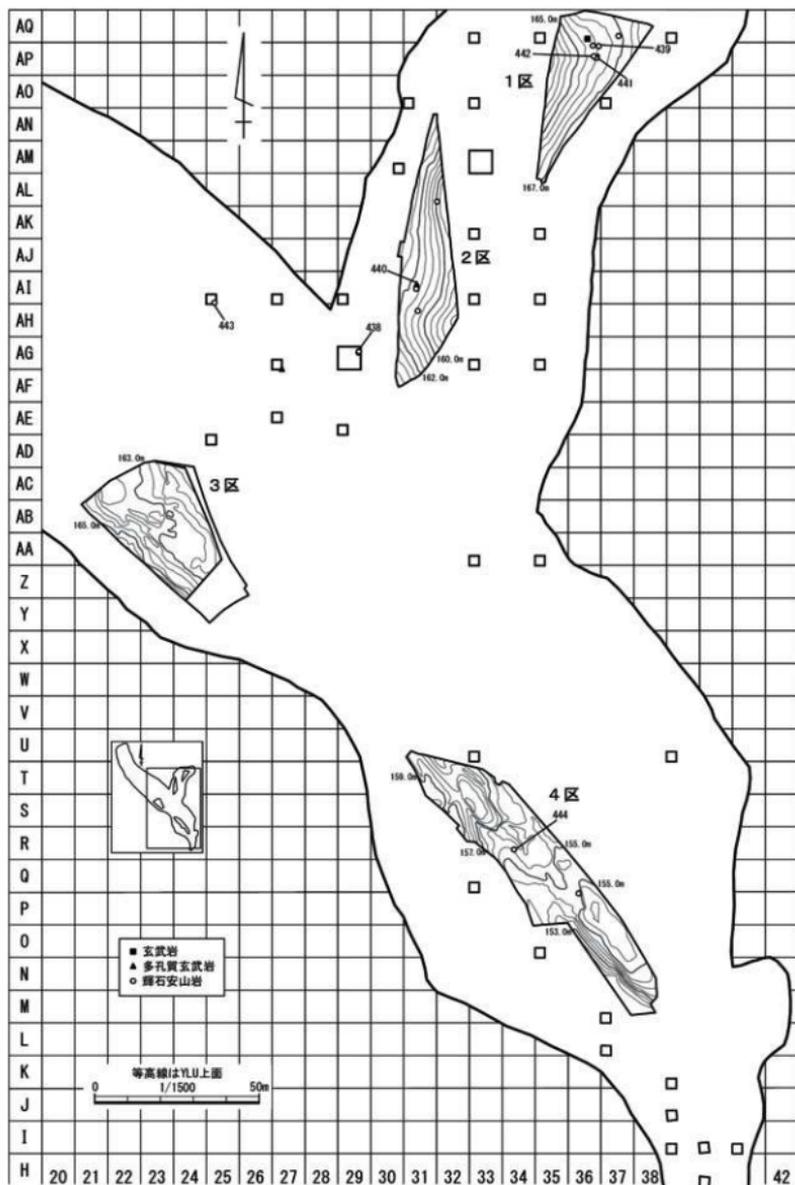
第102図 石核・打製石斧



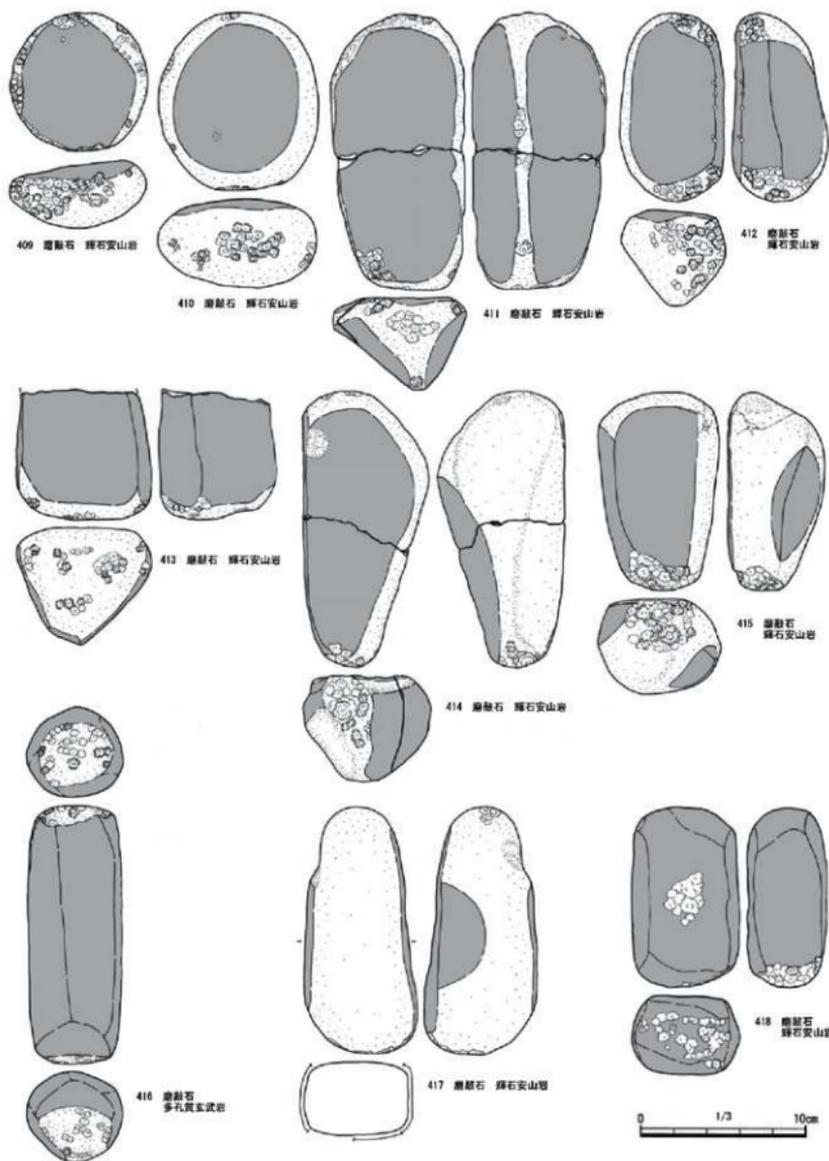
第103図 打製石斧・石器



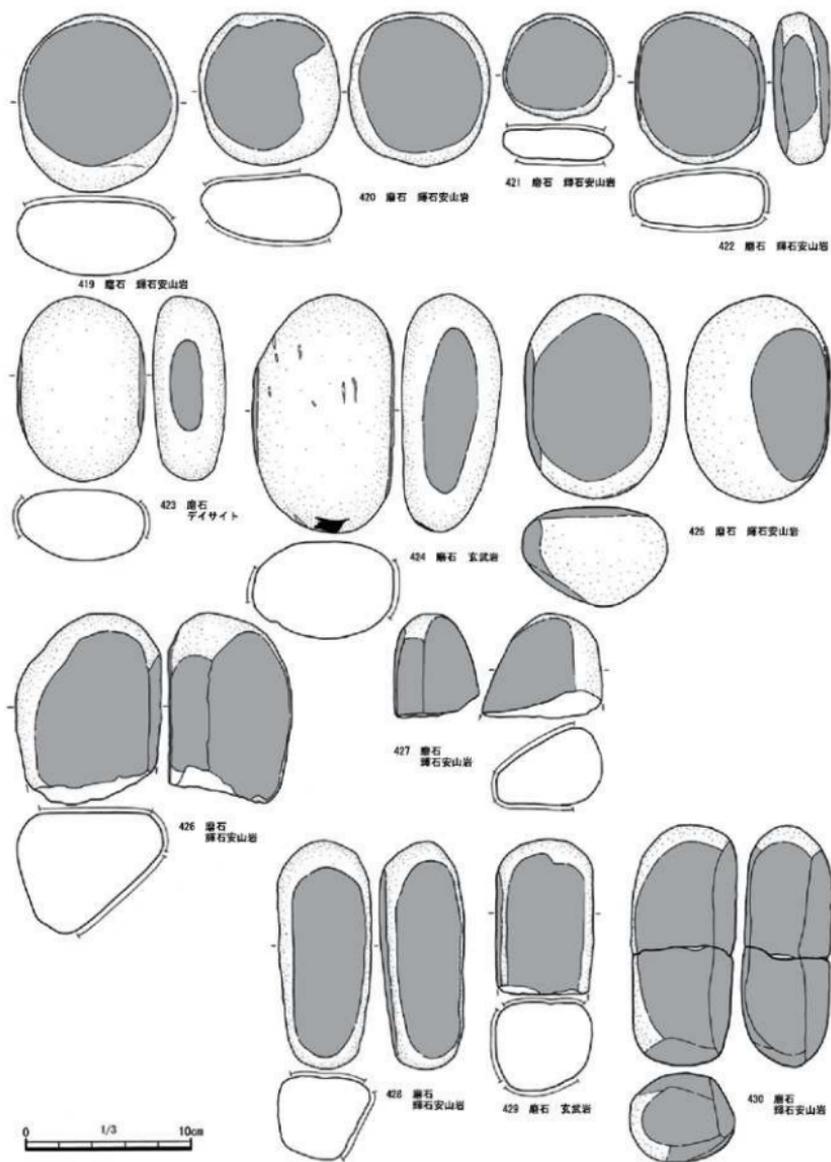
第104図 磨蝕石類分布図



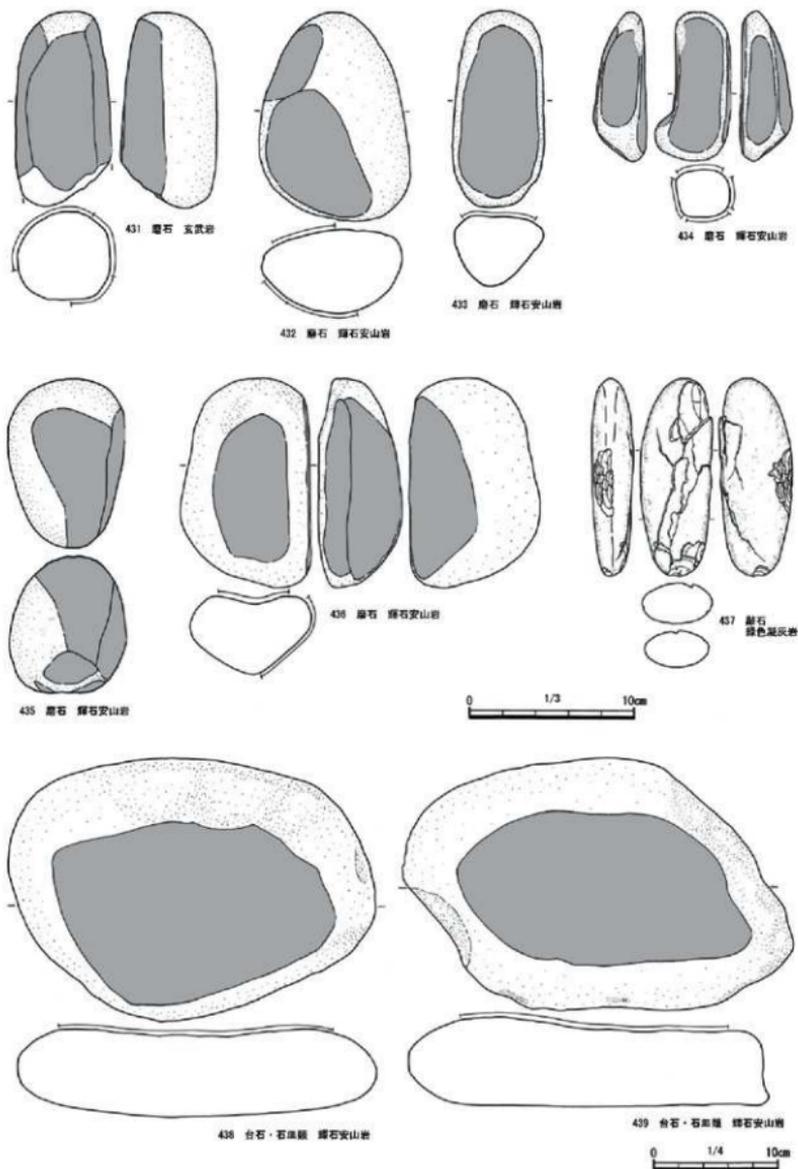
第105図 台石・石皿類分布図



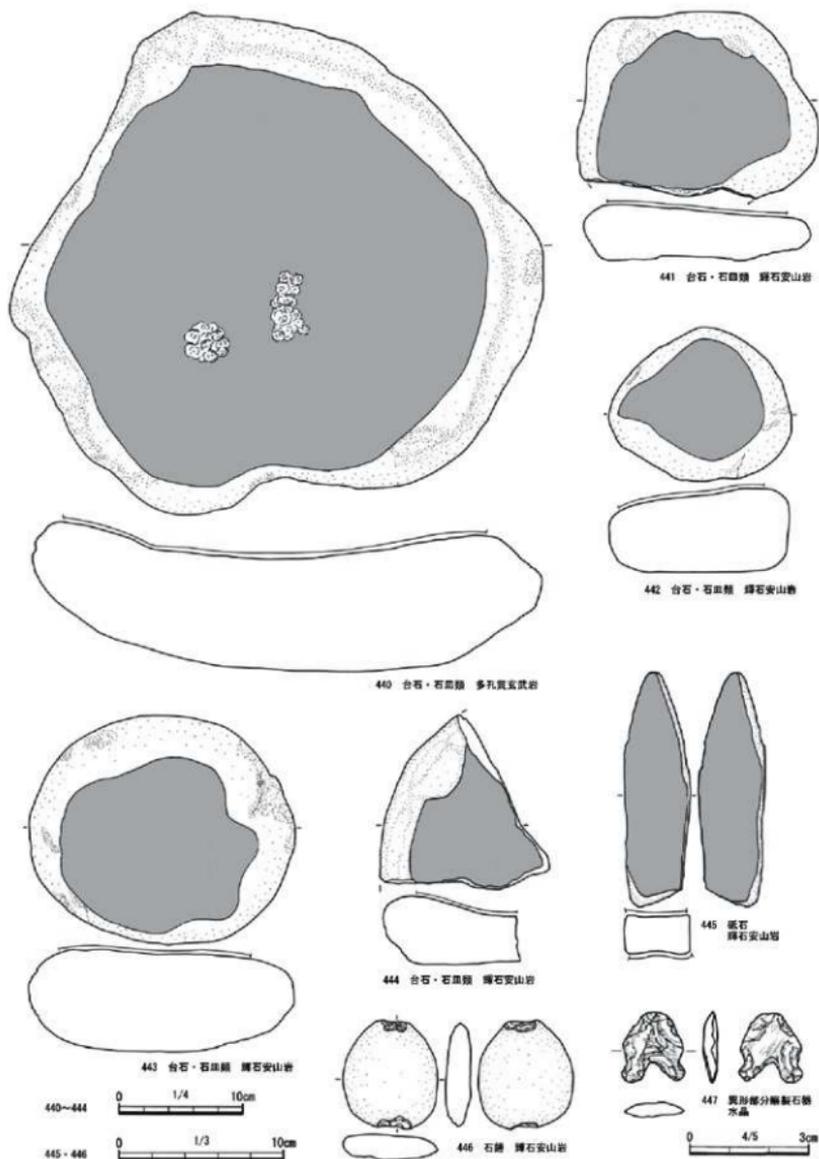
第106図 磨石類①



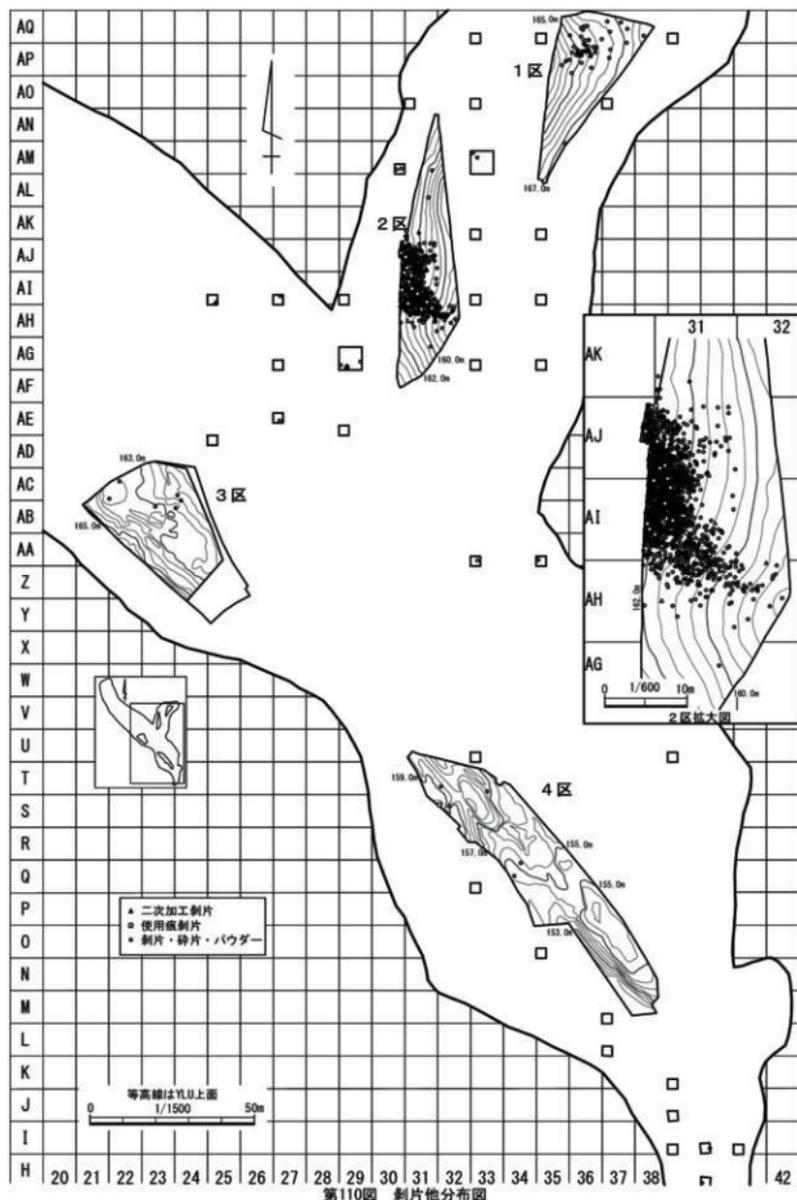
第107図 磨石類②



第108図 磨石類・台石・石臼類



第109図 台石・石皿類他



第110図 箭片他分布図

礫器(第103・112図 第21・22表 写真図版42)

408は礫器である。輝石安山岩を石材とする。扁平で楕円形を呈する礫を利用している。片面から剥離を行い、刃部を仕上げている。

磨敲石類(第104・106～108図 第21・22表)

409～437は磨敲石類である。石器表面に磨り・敲きの痕跡が観察される礫塊石器の一群である。礫自体の形状や磨り・敲きという機能の組み合わせ等により更に分類が可能である。出土位置は1・2区に多いが、3区でも比較的多く確認された。

409～418は磨敲石である。409・410は扁平な円礫を利用したもので、縁辺に敲打痕、片面に磨り痕が観察される。輝石安山岩を石材とする。411～418は長楕円～棒状の礫を利用した磨敲石である。そのうち411～414は断面が三角形を呈する資料である。磨り面が複数認められ、敲打痕は上下端部に多く認められる。415～418は断面が四角形～円形を呈する資料である。磨り面が複数認められ、敲打痕は端部に認められる。416は上下端部を除く部分全てを磨り面として使用されている。418は敲打痕が主要面中央に集中し、他の磨敲石と比較して使用方法のバリエーションが想起される。

419～436は磨石である。419～422は扁平な円礫を利用したものである。いずれも手のひら大の礫である。表裏に磨り面が認められるタイプや、422のように側縁にも磨り面が認められるものもある。423・424はやや扁平で長楕円形の礫を利用した石器である。両者とも両側縁にのみ磨り面が観察される。425～427・433は断面が三角形を呈するタイプで、425～427は側面と表裏面の計3面の磨り面が認められる。433は礫素材自体の断面が三角形を呈し、磨り面は1面のみである。428～431・434は棒状で断面が四角～円形を呈するタイプである。428は2面、429は3面の磨り面が観察される。430は下端面も磨り面としている。431はほぼ全周を磨り面とする。434は小型に分類される。

437は敲石である。扁平で長楕円形の礫を利用している。上下端部及び片側側面に敲打による剥離痕が観察される。緑色凝灰岩を石材とする。

台石・石皿類(第105・108・109図 第21・22表)

438～444は台石・石皿類である。共に大型で平坦面をもつ礫素材を使用し、作業台となしたものである。台石は平坦な面を機能面とし、磨り面、敲打痕等が観察される。石皿は凹面状の機能面があるものとするが、浅い凹面のものもあるので石皿と台石との厳密な区分が難しい。

438・439は台石の類か。僅かに窪む機能面を1面のみ持つ。440は石皿であるが、機能面のほぼ中央部に敲打痕集中が2箇所認められる。441・442は比較的小型の台石である。

砥石(第109・111図 第21・22表)

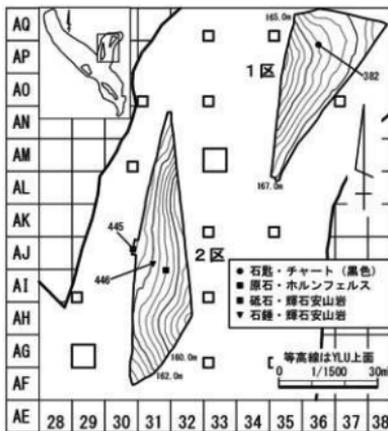
445は砥石の可能性がある。平滑な機能面が表裏2面認められたため、磨石とは区別している。輝石安山岩を石材とする。

石錘(第109・111図 第21・22表)

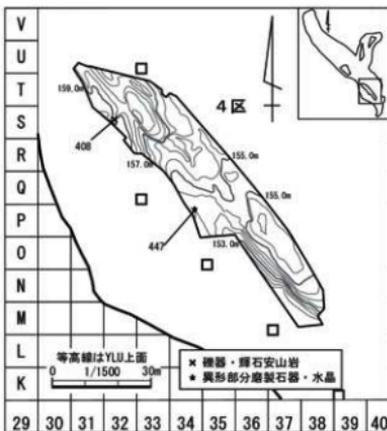
446は石錘である。輝石安山岩を石材とし、扁平な楕円礫を利用したもので、礫石錘である。両端を打ち欠いている。この他に加工痕は観察されない。

異形部分磨製石器(第109・112図 第21・22表)

447は異形部分磨製石器と考えられる。「トロトロ石器」とも呼称されるこの石器の表面は、融解でも



第111図 砥石・石鏡・石匙・原石分布図



第112図 砥石・異形部分磨製石器分布図

したかのような磨きがなされたものである。当該資料は水晶を石材とする。両面とも丁寧に剥離調整が行われた後に、磨きにより稜線が丸みを帯びる。先端部は丸く仕上げる。基部においては抉りを入れ、脚状に仕上げています。両脚部の先端部寄りの位置に浅く抉りを入れている。なお縄文時代の遺物の出土が少ない4区での出土遺物である。

剥片・碎片・二次加工剥片・使用痕剥片(第110図 第21表)

当該遺跡における剥片・碎片・二次加工剥片・使用痕剥片の出土位置は2区に集中する。尾根際のA1・A J 31グリッドから埋没谷地形にかけて濃密な分布を示している。

第21表 縄文時代遺構外出土石器組成表

	土器部	石器部																		計						
		尖頭器 未製品	石 頭	石 葉 未製品	ス ラ イ バ ー	環 器	削 器	抉 入 削 器	石 匙	埋 込 石 鏡	石 鏡	打 製 石 片	二 次 加 工 削 片	使 用 痕 削 片	製 片 ・ 碎 片 鏡	磨 石	磨 石	砥 石	石 鏡 ・ 石 葉 類		石 鏡	石 鏡	石 鏡	異 形 部 分 磨 製 石 器		
溝 石	天城前神	AGK		5		1									5										11	
	踏履環	INHL									1														2	
	神津島原地島	K20E	1	1	98	20		2	5			15	24		2	1	219								388	
	原田集ヶ池	SHHD	1		10	1				1	2		1	3			4								23	
	知豆の家次	MOG	1																							1
	和田原山	WDTY																								1
	産地不明				3										23	20	2397									2443
黒曜石計		3	1	118	21		3	6	2		16	28		25	21	2625									2869	
玉 器	玉貫通	Ba															10		2						12	
	多利羅玄武岩	Vbn																							1	
	ガラス質黒色安山岩	GAn		2	2				1								237		1	3		2			242	
	総持安山岩	FAn										2				17									19	
	輝石安山岩	An(Py)										1			1	1	36	75	1	13		1	1		130	
	角閃石安山岩	An(Hb)																							1	
	アイサイト	Op																		2					2	
	流紋岩	Rhy														1									2	
	総持斑レイ岩	FG														1									1	
	水晶	RC																							1	
	碧玉	Ja					1																		1	
	碧玉石(碧玉)	RJa														3									3	
	ホルンフェルス	Hrn		2									4			191					1					199
	片状ホルンフェルス	Hr(Sc)														1									1	
	総持凝灰岩	FT					1						1			9										11
	黒色凝灰岩	GT											1			1				1						4
	頁岩	Sh												4			1									5
	総持砂岩	FSS		1													8									7
	中粒砂岩	MSS														2					1					3
	チャート(黒色)	Ch(B)																								1
計		3	2	122	23	2	3	9	2	1	16	33	11	25	21	3094	1	37	92	2	17	1	1	1	3520	

第22表 縄文時代遺構外出土石器計測表①

神岡 番号	写真 図録 番号	遺物番号	杖巻	層位	グリッド	器種	石材	推定産地	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	接合 番号
298	38	5448	FB	AI-31		尖頭鏃	ガラス質黒色安山岩		11.2	3.2	1.1	36.4	
299	38	3380	FB	A0-36		尖頭鏃	ガラス質黒色安山岩		9.8	4.4	1.0	52.6	
300	38	3960	FB	AI-32		尖頭鏃	ホルンフェルス		5.5	2.3	1.1	13.5	
301	38	7332	FB	AH-31		尖頭鏃	ホルンフェルス		(3.5)	1.7	0.9	4.7	
302	38	5689	FB	AI-31		尖頭鏃	ホルンフェルス		(3.4)	1.6	0.7	4.0	
303	38	7152	FB	AH-31		尖頭鏃	ホルンフェルス		(2.9)	1.7	0.9	4.8	
304	38	6140	FB	AJ-31		尖頭鏃	ホルンフェルス		(3.7)	2.4	1.2	8.2	
305	38	9027	FB	AI-31		尖頭鏃	ホルンフェルス		(4.0)	3.3	1.3	12.1	
306	38	2325	FB	AI-31		尖頭鏃未製品	黒曜石	神津島恵島島	9.0	6.0	1.8	83.6	
307	38	4480	YLU	AP-37		有背尖頭鏃	ホルンフェルス		7.2	2.0	0.7	10.1	
308	38	10648	YLU	AH-31		有背尖頭鏃	ガラス質黒色安山岩		6.2	1.5	0.7	5.4	
309	38	9138	FB	AJ-31		有背尖頭鏃	ガラス質黒色安山岩		3.2	1.4	0.4	1.4	
310	38	5964	FB	AI-31		有背尖頭鏃	ホルンフェルス		3.1	1.0	0.5	1.4	
311	38	3079	FB	AO-37		有背尖頭鏃	珪質頁岩		(5.7)	1.3	0.5	4.0	
312	38	13137	緑土中	-		有背尖頭鏃	ホルンフェルス		(6.0)	1.4	0.5	4.9	
313	38	2974	FB	AP-37		有背尖頭鏃	ホルンフェルス		(4.3)	1.3	0.4	3.1	
314	38	10880	YLU	AJ-31		有背尖頭鏃	ガラス質黒色安山岩		(4.3)	1.2	0.5	2.5	
315	38	4491	YLU	AP-37		有背尖頭鏃	黒曜石	天城峠峠	(2.3)	1.5	0.4	1.0	
316	38	5319	FB	AI-31		有背尖頭鏃	ホルンフェルス		(3.7)	1.8	0.6	4.4	
317	38	9150	FB	AJ-31		有背尖頭鏃	ホルンフェルス		(4.1)	1.2	0.5	3.6	
318	38	3723	ZH	AP-36		有背薄型尖頭鏃	粘板岩		(3.3)	1.6	0.3	1.7	
319	38	2671	FB	AO-36		石鏃	黒曜石	諏訪里ヶ台	1.83	1.13	0.19	0.5	
320	39	5290	FB	AH-31		尖頭鏃	黒曜石	神津島恵島島	3.1	1.7	0.7	3.4	
321	39	4859	FB	AJ-31		尖頭鏃	黒曜石	諏訪里ヶ台	1.3	0.7	0.2	0.2	
322	39	7338	FB	AI-31		尖頭鏃	黒曜石	和田小沢沢	(2.7)	1.4	0.5	0.5	
323	39	4327	KGP	AH-31		尖頭鏃未製品	細粒砂岩		4.3	1.4	0.6	4.9	
324	39	8943	FB	AI-31		尖頭鏃未製品	黒曜石	神津島恵島島	3.3	2.4	0.9	6.0	
325	39	11335	黒色土	AV-08		石鏃	黒曜石	天城峠峠	(2.4)	1.8	0.5	1.6	
326	39	6	黒色土	AI-33		石鏃	黒曜石	諏訪里ヶ台	1.8	1.3	0.2	0.5	
327	39	6036	FB	AI-30		石鏃	黒曜石	天城峠峠	1.4	1.8	0.2	0.5	
328	39	9990	ZH	AI-31		石鏃	黒曜石	神津島恵島島	1.5	0.8	0.2	0.5	
329	39	5330	FB	AH-31		石鏃	黒曜石	神津島恵島島	1.9	1.4	0.2	0.5	
330	39	9114	FB	AI-31		石鏃	黒曜石	神津島恵島島	1.8	(1.2)	0.2	0.6	
331	39	6526	FB	AI-31		石鏃	黒曜石	神津島恵島島	1.4	(1.0)	0.2	0.4	
332	39	9715	ZH	AI-31		石鏃	黒曜石	神津島恵島島	1.4	(1.0)	0.2	0.3	
333	39	5990	FB	AI-31		石鏃	黒曜石	神津島恵島島	2.0	(1.8)	0.3	1.1	
334	39	4754	FB	AI-31		石鏃	黒曜石	神津島恵島島	0.8	(1.1)	0.2	0.2	
335	39	7143	FB	AH-31		石鏃	黒曜石	神津島恵島島	(1.3)	1.8	0.3	0.5	
336	39	8424	FB	AK-32		石鏃	黒曜石	神津島恵島島	(1.3)	1.5	0.3	0.4	
337	39	1851	FB	AP-37		石鏃	黒曜石	和田山山	1.7	1.4	0.3	0.6	
338	39	12036	KU	P-34		石鏃	黒曜石	神津島恵島島	1.2	1.4	0.4	0.6	
339	39	9536	ZH	AI-30		石鏃	黒曜石	箱根燧燧	1.6	1.5	0.3	0.7	
340	39	2921	FB	AO-37		石鏃	黒曜石	神津島恵島島	1.6	(1.1)	0.4	0.6	
341	39	5317	FB	AI-31		石鏃	黒曜石	神津島恵島島	(1.6)	(1.5)	0.4	1.0	
342	39	2490	FB	AP-37		石鏃	黒曜石	神津島恵島島	1.2	(1.0)	0.3	0.3	
343	39	7116	FB	AO-31		石鏃	黒曜石	諏訪里ヶ台	1.7	1.4	0.4	0.9	
344	39	2083	2 黄土	TP-25		石鏃	ガラス質黒色安山岩		(2.2)	1.6	0.4	1.1	
345	39	7127	FB	AH-31		石鏃	黒曜石	神津島恵島島	1.5	1.4	0.5	0.8	
346	39	3818	ZH	AP-37		石鏃	ホルンフェルス		2.2	1.7	0.3	0.9	
347	39	13051	FB	Z-23		石鏃	黒曜石	神津島恵島島	2.3	2.0	0.6	1.8	
348	39	7373	FB	AH-30		石鏃	黒曜石	諏訪里ヶ台	2.0	1.3	0.4	0.9	
349	39	3080	FB	AO-36		石鏃	黒曜石	諏訪里ヶ台	2.1	1.5	0.4	1.1	
350	39	6665	FB	AI-31		石鏃	黒曜石	神津島恵島島	(1.5)	(1.2)	0.2	0.4	
351	39	5300	FB	AI-31		石鏃	黒曜石	神津島恵島島	(1.3)	(1.4)	0.2	0.3	
352	39	8389	FB	AH-31		石鏃	黒曜石	神津島恵島島	(1.9)	(1.4)	0.3	0.7	
353	39	5724	FB	AI-31		石鏃	黒曜石	神津島恵島島	1.8	(1.4)	0.3	0.7	
354	39	3874	FB	AJ-31		石鏃	黒曜石	諏訪里ヶ台	(1.4)	(1.2)	0.2	0.4	
355	39	5236	YLU	AP-37		石鏃	ガラス質黒色安山岩		3.1	2.3	0.5	3.2	
356	39	10921	YLU	AI-30		石鏃	黒曜石	神津島恵島島	2.2	1.5	0.4	1.1	
357	39	4081	ZH	AO-36		石鏃	黒曜石	神津島恵島島	(1.6)	1.3	0.2	0.5	
358	39	4330	KGP	AH-31		石鏃未製品	ガラス質黒色安山岩		(2.2)	2.0	0.7	2.5	
359	39	10474	YLU	AI-31		石鏃未製品	黒曜石	神津島恵島島	1.9	1.5	0.4	1.0	
360	39	326	FB	AI-31		石鏃未製品	黒曜石	神津島恵島島	2.3	1.8	0.6	2.4	
361	39	4880	FB	AJ-31		石鏃未製品	黒曜石	神津島恵島島	2.4	2.2	0.7	2.8	
362	39	5318	FB	AI-31		石鏃未製品	黒曜石	神津島恵島島	(2.3)	2.8	0.9	3.8	
363	39	5237	YLU	AP-37		石鏃未製品	ガラス質黒色安山岩		2.2	1.4	0.4	1.0	
364	39	1301	NCC	AG-29		石鏃未製品	黒曜石	諏訪里ヶ台	1.5	1.6	0.5	1.0	
365	39	10182	ZH	AJ-30		石鏃未製品	黒曜石	神津島恵島島	(1.8)	3.0	0.4	1.8	
366	39	10158	ZH	AJ-31		石鏃未製品	黒曜石	神津島恵島島	2.4	(1.8)	0.4	1.5	
367	40	6652	FB	AI-31		スクレイパー	粘結凝灰岩		72.0	52.0	23.0	85.4	
368	40	6942	FB	AJ-31		スクレイパー	碧玉		(2.7)	1.2	0.5	1.9	
369	40	6067	FB	AJ-30		撚器	黒曜石	神津島恵島島	3.1	(1.5)	0.8	3.0	
370	40	4806	FB	AJ-31		撚器	黒曜石	神津島恵島島	1.6	1.8	1.0	3.0	
371	40	2574	FB	AP-37		撚器	黒曜石	神津島恵島島	2.4	1.7	0.9	3.3	
372	40	5208	FB	AH-31		撚器	黒曜石	諏訪里ヶ台	(3.0)	2.2	0.6	4.3	
373	40	1118	FB	S-33		撚器	ホルンフェルス		5.3	2.8	1.2	21.4	
374	40	8374	FB	AH-31		撚器	黒曜石	神津島恵島島	4.5	1.7	0.8	5.2	

第22表 縄文時代遺構外出土石器計測表②

神岡 番号	写真 図面 番号	遺物番号	杖番	層位	グリッド	器種	石材	推定産地	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	接合 番号
375	40	12381	FB	0-34	削器	ガラス質黒色火山岩			(5.9)	4.1	1.2	22.4	
376	40	497	FB	A0-31	削器	流紋岩			5.7	2.9	0.7	8.0	
377	40	5522	FB	A1-30	削器	黒曜石	神津島原始島		(4.5)	2.4	1.2	9.1	
378	40	5729	FB	A1-31	削器	黒曜石	神津島原始島		(2.5)	4.0	1.4	10.2	
379	40	8176	FB	A1-30	削器	黒曜石	神津島原始島		(1.9)	(3.4)	1.0	5.1	
380	40	669	FB	A1-31	挟入削器	黒曜石	諏訪ヶ台		(3.0)	2.8	1.1	6.7	
381	40	6485	FB	AJ-31	挟入削器	黒曜石	諏訪ヶ台		1.9	1.7	0.6	1.5	
382	40	1879	FB	AP-36	石匙	チャート(黒色)			5.2	6.6	1.0	21.3	
383	40	5727	FB	A1-31	磨石	黒曜石	神津島原始島		2.5	1.3	1.0	3.8	
384	40	7336	FB	AH-31	磨石	黒曜石	神津島原始島		2.5	1.8	0.9	3.4	
385	40	6345	FB	AH-31	磨石	黒曜石	神津島原始島		3.0	1.2	1.0	2.7	
386	40	3269	FB	A0-36	磨石	黒曜石	神津島原始島		2.5	1.7	0.7	2.6	
387	40	9525	2W	AH-31	磨石	黒曜石	神津島原始島		(1.9)	1.5	0.9	1.8	
388	40	10073	2W	A1-31	磨石	黒曜石	神津島原始島		(1.8)	1.7	0.8	2.7	
389	41	12636	FB	AC-21	石杖	黒曜石	諏訪ヶ台		2.0	2.9	1.6	20.0	109
390	41	6664	FB	A1-31	石杖	黒曜石	神津島原始島		2.3	2.6	1.8	10.5	109
391	41	312	FB	A1-31	石杖	黒曜石	神津島原始島		2.0	2.8	1.3	7.4	
392	41	6681	FB	A1-31	石杖	黒曜石	神津島原始島		2.8	2.9	1.6	11.2	
393	41	6077	FB	AJ-30	石杖	黒曜石	神津島原始島		3.0	2.7	1.5	15.4	112
394	41	4824	FB	AJ-31	石杖	黒曜石	神津島原始島		2.3	2.8	1.3	7.6	112
395	41	5303	FB	A1-31	石杖	黒曜石	神津島原始島		1.6	2.9	0.9	4.4	
396	41	5289	FB	AH-31	石杖	黒曜石	神津島原始島		2.1	4.1	1.3	9.8	
397	41	4363	KGP	A1-31	石杖	黒曜石	神津島原始島		3.1	2.6	1.0	8.1	
398	41	6939	FB	AJ-31	石杖	黒曜石	神津島原始島		4.1	3.8	1.4	19.0	
399	41	5654	FB	A1-31	石杖	ホルンフェルス			6.3	5.4	1.6	76.6	
400	41	383	FB	AK-31	石杖		神津島原始島		3.8	2.5	1.4	10.2	
401	41	3343	FB	A0-36	石杖	黒曜石	神津島原始島		1.8	3.0	0.9	4.6	
402	41	9368	FB	A1-30	石杖	黒曜石	神津島原始島		3.3	4.7	1.8	22.9	
403	41	12292	KU	R-35	石杖	ホルンフェルス			5.4	16.4	7.2	816.7	
404	41	12763	FB	AB-23	石杖	ホルンフェルス			3.8	7.5	4.0	126.0	
405	42	11651	KR	N-37	打製石斧	中粒砂岩			(10.0)	5.0	1.0	69.7	
406	42	11981	KU	T-32	打製石斧	中粒砂岩			(7.9)	4.1	1.4	59.1	
407	42	12291	KU	R-35	打製石斧	輝石火山岩			17.4	11.4	2.7	716.7	
408	42	12238	FB	S-32	磨石	輝石火山岩			131.0	110.0	41.0	730.0	
409		315	FB	A1-31	磨石	輝石火山岩			8.5	8.4	4.2	417.9	
410		1730	AN	AP-36	磨石	輝石火山岩			18.9	9.7	5.4	701.9	110
411		8635	FB	A1-31	磨石	輝石火山岩			16.9	8.1	5.6	1057.4	110
411		10364	2W	A1-31	磨石	輝石火山岩			-	-	-	-	
412		2274	FB	A1-31	磨石	輝石火山岩			11.5	6.3	5.8	583.3	
413		1674	NSC	A1-35	磨石	輝石火山岩			(8.0)	8.2	7.2	707.8	
414		61	NSC	A1-31	磨石	輝石火山岩			16.9	7.7	6.5	988.6	
414		7042	FB	A1-31	磨石	輝石火山岩			-	-	-	-	
415		5858	FB	A1-31	磨石	輝石火山岩			12.1	7.3	5.9	755.7	
416		3550	FB	AP-36	磨石	多孔質玄武岩			15.7	5.8	5.5	756.8	
417		3777	2W	AP-37	磨石	輝石火山岩			15.0	6.8	4.4	625.4	
418		7631	FB	AH-31	磨石	輝石火山岩			11.0	6.5	4.8	626.1	
419		2948	FB	A0-36	磨石	輝石火山岩			1086.0	9.6	4.6	617.3	
420		13103	FB	AB-23	磨石	輝石火山岩			9.2	8.5	4.0	439.6	
421		1364	FB	AG-29	磨石	輝石火山岩			6.5	6.5	2.2	126.8	
422		1339	FB	AG-29	磨石	輝石火山岩			9.3	7.8	3.4	348.1	
423		3628	FB	AP-36	磨石	デイサイト			11.3	7.7	4.3	517.5	
424		8623	FB	A1-31	磨石	玄武岩			14.5	8.5	6.0	1061.3	
425		2403	FB	AP-36	磨石	輝石火山岩			12.8	4.8	5.9	1007.7	
426		9658	FB	A1-31	磨石	輝石火山岩			(11.7)	8.8	7.4	1052.4	
427		9560	2W	A1-31	磨石	輝石火山岩			6.4	7.3	5.0	276.0	
428		7629	FB	AH-31	磨石	輝石火山岩			13.9	5.6	5.3	622.7	
429		6260	FB	A1-30	磨石	玄武岩			9.6	5.6	5.4	589.0	
430		1556	FB	AJ-31	磨石	輝石火山岩			14.7	6.2	5.2	815.4	
430		6655	FB	A1-31	磨石	輝石火山岩			-	-	-	-	
431		2913	FB	A0-37	磨石	玄武岩			12.0	5.8	5.4	567.3	
432		10363	2W	A1-31	磨石	輝石火山岩			12.8	9.0	5.7	852.8	
433		13132	FB	AA-25	磨石	輝石火山岩			12.0	5.5	5.1	463.4	
434		8843	FB	A1-30	磨石	輝石火山岩			9.0	4.2	3.0	156.3	
435		3616	FB	AP-36	磨石	輝石火山岩			10.4	7.0	8.3	683.4	
436		5962	FB	A1-31	磨石	輝石火山岩			12.8	7.9	5.3	761.0	
437		3659	FB	A1-31	磨石	輝石火山岩			12.1	4.3	5.9	199.0	
438		1507	FB	AG-29	台石・石皿類	輝石火山岩			21.5	29.2	73.0	8400.0	
439		4185	2W	AP-36	台石・石皿類	輝石火山岩			20.7	31.7	7.4	6450.0	
440		8241	FB	A1-31	台石・石皿類	多孔質玄武岩			43.5	43.0	12.6	29000.0	
441		4180	2W	AP-36	台石・石皿類	輝石火山岩			15.2	19.5	4.6	2330.0	
442		4181	2W	AP-36	台石・石皿類	輝石火山岩			12.5	14.8	7.0	1790.7	
443		47	FB	A1-25	台石・石皿類	輝石火山岩			18.7	21.5	8.3	4940.0	
444		12135	KU	R-34	台石・石皿類	輝石火山岩			13.6	13.5	5.6	1066.3	
445		9600	KGP	AJ-30	硯石	輝石火山岩			14.2	3.9	3.9	247.8	
446		2311	FB	AJ-31	石鏝	輝石火山岩			6.7	5.7	1.5	87.7	
447		12035	KU	P-34	異形部分磨製石器	水晶			1.7	1.5	0.4	1.1	

第4節 弥生時代以降の遺構と遺物

1 概要

富沢内野山Ⅰ西遺跡の調査では、弥生時代以降の遺構及び遺物が2・4区で確認された。遺構は溝状遺構・土坑・炉跡で、主に中世以降か。一方、遺物は弥生時代～平安時代が主体と考えられ、遺構と遺物年代との乖離が生じている。該期の生活痕跡は地表面から浅かったために失われたか。

2 遺構

(1) 溝状遺構(第113・114図 第23表)

1号溝は2区AⅠ・AJ32グリッドに位置し、新期スコリア層上面にて確認された。遺構は標高159mの等高線にほぼ平行するように北へ延びる。長さ4.12m、最大幅0.48mである。溝の東辺は部分的に失われている。底面は平坦である。溝北側には中世以降の円形土坑が3基確認され、その関連性から所屬時期は中世以降か。

(2) 土坑(第113・114図 第23表)

中世以降の所謂「円形土坑」で、計5基確認されている。23号土坑は2区AM・AN31グリッドに位置する。2区でも北端部付近に位置し、標高162.5m付近に位置する。新期スコリア層中位から下位において確認された。24～26号土坑は2区AJ32グリッドに位置する。27号土坑は4区Q34グリッドに位置する。土坑内部から銅製品(448)が出土している。

(3) 炉跡(第113・114図 第23表)

3号炉跡は2区AG30グリッドに位置する。2区南端部西壁際の新期スコリア層上面で確認されている。前述の溝状遺構や土坑とは位置的に離れ、支谷の斜面上方にある。炉跡内部には焼土が堆積し、焼土上に灰軸陶器の破片が1点出土している。しかし灰軸陶器自身は被熱した痕跡が認められない。厳密に遺構に伴うものかどうかは判然としないが、平安時代以降の炉跡として考えられる。

3 遺物

(1) 土器(第115図 第24表)

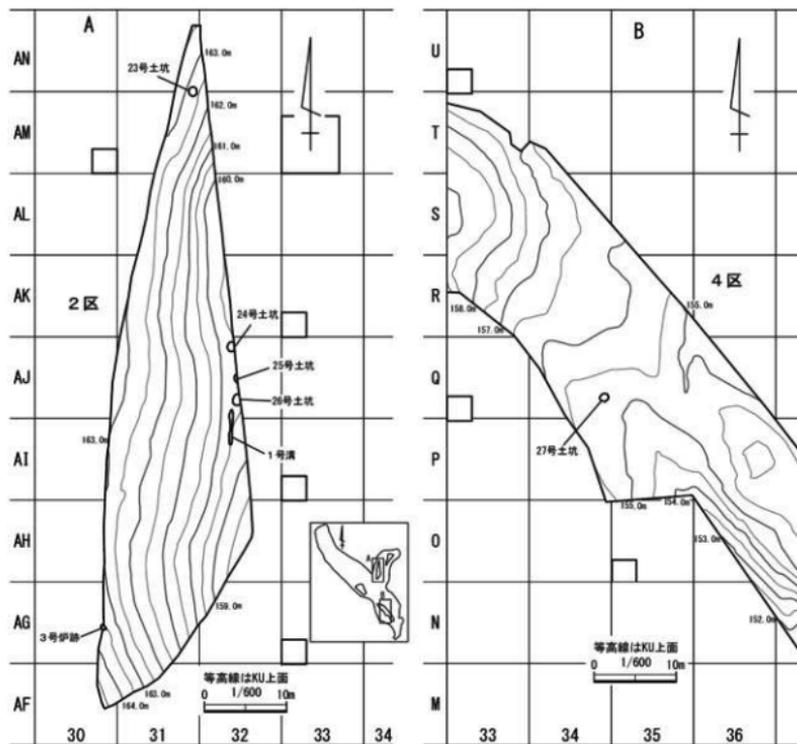
449は弥生時代後期以降の壺の底部か。451は弥生時代後期から古墳時代前期にかけての台付甕である。台部から胴部中位にかけて残存している。453・454は土師器である。452は須恵器の甕である。胴部のみの破片資料である。455は古墳時代の土師器環である。内外面共に丁寧にミガキが施され、また赤彩の痕跡も残存する。456は灰軸陶器の碗である。口縁部は外反させ、丸く仕上げている。457も灰軸陶器である。長頸壺の肩部から頸部にかけて残存する。458は土師器甕の口縁部で、平安時代のものか。

(2) 石器(第115図)

459は弥生時代の磨製石鎌である。両面とも丁寧に磨かれている。中央部には両面穿孔された所謂「有孔磨製石鎌」である。石材は珪質粘板岩である。

(3) 金属製品(第114図 第25表)

448は銅製品である。仏具の花瓶(けびょう)の把手か。27号土坑から出土している。



第113図 古代以降の遺構位置図

第23表 古代以降の遺構計測表

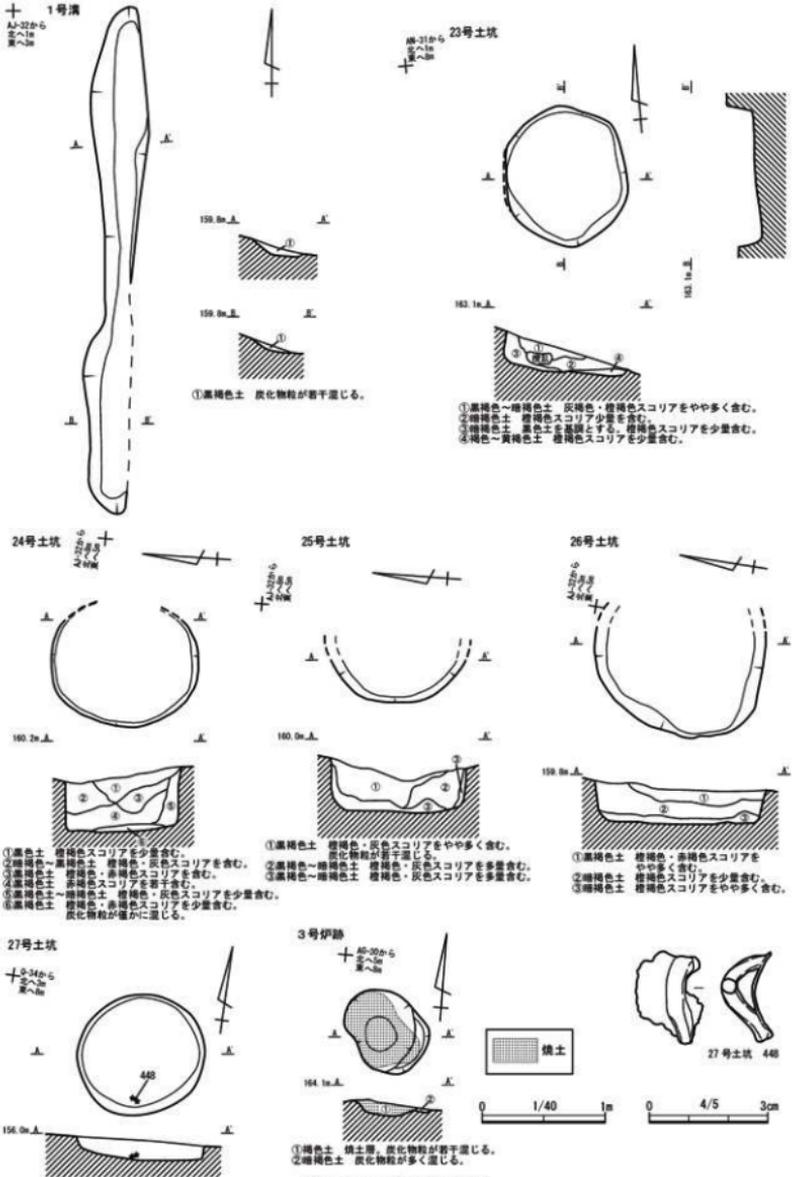
観測遺構名	調査遺構名	グリッド	層位	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	土器	石器	礎	灰化物	計	備考
23号土坑	SF11	AM-31	KGP	1.16	0.96	0.23						
24号土坑	SF15	AJ-32	NSC	1.19	-	0.51						
25号土坑	SF13	AJ-32	NSC	-	-	0.40						
26号土坑	SF12	AJ-32	NSC	-	1.39	0.32						
27号土坑	-	Q-34	D31	1.04	1.01	0.17						銅製品2点
3号伊勢	S303	AG-30	NSC	0.73	0.52	0.12						
1号溝	S301	AI-32	NSC	4.12	0.48	0.11						

第24表 弥生時代以降土器観察表

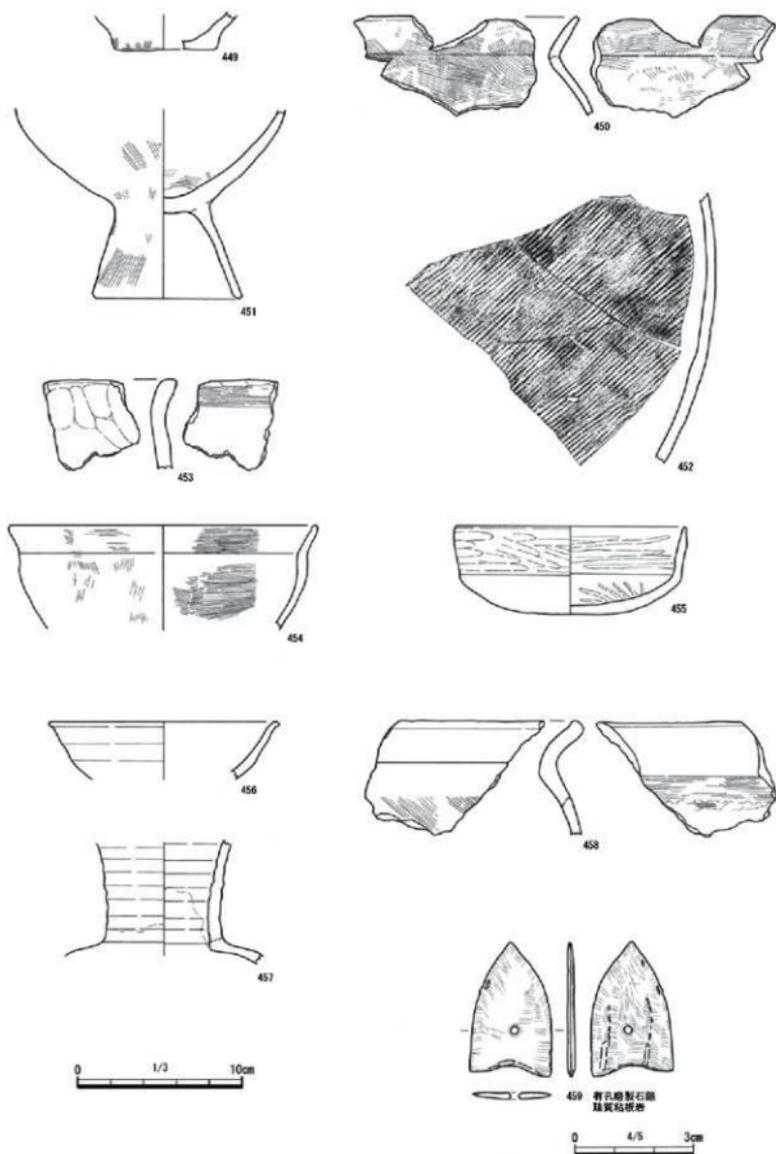
探頭番号	遺物番号	層位	グリッド	種別	器種	残存部位	器面調整			測定値	備考
							外面	内面			
449	11841	黒色土	AB-23	弥生土器	釜	底部	ハケメ		底径 (64mm)		
450	1048	NSC	1-41	弥生土器	甕	口縁部	ハケメ	ハケメ			遺状口縁
451	571	NSC	1-41	弥生土器	甕	胴一底部	ハケメ	ハケメ	底径 90mm		台付き
452	11707	黒色土	Z-25	須恵系	甕	胴部	ハケメ	ハケメ ナデ			
453	739	不明	AG-31	土師器	甕	口縁部	指頭圧痕	ハケメ			
454	11730	黒色土	Z-24	土師器	甕	口縁部	ハケメ	ハケメ	口径 (186mm)		
455	11741	表土	AA-24	土師器	坏	口縁部	ミガキ	ミガキ ケズリ	口径 (130mm)		赤掻有り
456	13146	表掻	-	応軸陶器	碗	口縁部	ナデ		口径 (136mm)	残存高 35mm	自然釉
457	4	-	AG-33	応軸陶器	釜	胴部	ナデ			残存高 57mm	
458	11717	黒色土	Z-24	土師器	甕	口縁部	ハケメ ナデ	ハケメ ナデ			

第25表 銅製品観察表

探頭番号	遺物番号	層位	グリッド	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)
448	1429	D31	Q-34	銅製品	23.0	15.8	12.2	3.62



第114図 古代以降の遺構



第115図 弥生時代以降の遺物

第3章 富沢内野山Ⅲ北遺跡(C R36地点)

第1節 基本層序と土層の堆積状況

富沢内野山Ⅲ北遺跡は愛鷹山東麓の樹枝状に発達した尾根上に位置し、この尾根上はやや狭長ながらも平坦な土地が広がっている。この富沢内野山Ⅲ北遺跡が位置する尾根は標高230～240m付近から扇状に平坦地が展開し、その扇状に広がる平坦地もさらに派生する谷地形により樹枝状を呈している。標高200m付近からは富沢内野山Ⅰ西遺跡が位置する谷地形が派生し、当該遺跡は前章でも触れたこの遺跡を南東に臨む位置にある。尾根の末端には尾畑遺跡が位置し、縄文時代中期の遺物が認められるため、当該遺跡との関連性を想起させる。

第4・5図で示したように、当該遺跡の範囲は、C R36地点の内、1区・2-1区・2-2区・2-3区・4区・7-1区(一部)に該当する。第116図は当該遺跡で最も基準的な層序を示しているものと考えられた2-3区AW36グリッドのテストピット61で観察された土層である。基準的な層序は富沢内野山Ⅰ西遺跡と同様と考えられる。

1層は表土で腐食土である。遺跡付近の地目は山林と畑で、地表近くには樹皮・木葉等植物遺体が観察される。

2層は新期スコリア層を含む層で、このテストピット61では褐灰色を呈する土層である。地点によってその堆積が判然としない箇所がある。富沢内野山Ⅰ西遺跡1・2区では表土直下に黒色土の堆積が観察されていたが、当該遺跡では黒色土に該当する層位は確認されていない。

3層はワゴ平パミス(KGP)が認められた層で、このテストピット61では褐灰色を呈する土層である。当該遺跡においては2区付近のみ認められた層位である。

4層は愛鷹箱根基本層序という暗褐色土層に該当か。富沢内野山Ⅰ西遺跡では1区A S39、B A07グリッドで確認されるが、谷地形内の調査区では判然としない。

5層は栗色土層である。富沢内野山Ⅰ西遺跡同様、地点によっては下位の富士黒土層と明瞭に分離されなかった層位である。略号はKUである。

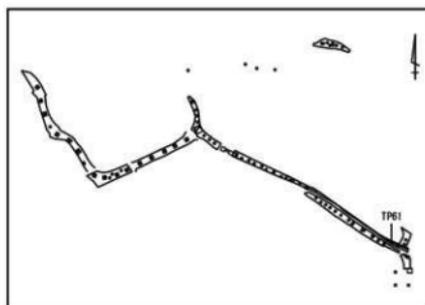
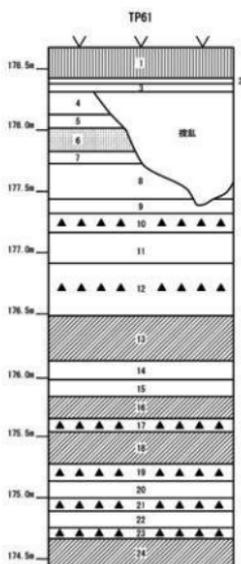
6層は富士黒土層である。略号はFBである。栗色土層と明瞭に分層出来ず、現地調査でKFと表記された箇所がある。

7層は漸移層である。略号はZNである。富士黒土層と休場層との間層であり、色調はにおい黄褐色土を呈する。

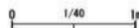
8～11層は休場層である。そのうち8層は休場層上層、9層は休場層中層に分層された。10層は休場層下部スコリアとされ、この堆積により11層休場層下層が9層と隔てられている。富沢内野山Ⅰ西遺跡の調査では休場層上層と中層を分つ休場層上部スコリアの堆積が、幾つかのテストピットで確認されていたが、当該遺跡では休場層上部スコリアが確認されてはならず、また休場層下部スコリアにしても当該テストピット付近のみ堆積が認められたに過ぎない。略号はYLU・YLM・YLS2・YLLである。なお富沢内野山Ⅰ西遺跡では休場層中層を中心に第Ⅲ文化層が設定されたが、当該遺跡では休場層上層にて尖頭器が出土している。

12層は第Ⅰスコリア層である。略号はSCIである。富沢内野山Ⅰ西遺跡ではこの層と休場層下層との間に休場層直下黒色帯が2区で確認されているが、当該遺跡では認められていない。

13層は第Ⅰ黒色帯である。略号はBBIである。富沢内野山Ⅰ西遺跡における旧石器時代第Ⅱ文化層



- 1 表土
- 2 NSC (新期スコリア層)
- 3 NSP (コアゴホホミス)
- 4 AN (凝褐色土層)
- 5 KU (黒色土層)
- 6 Fc (粘土層)
- 7 ZN (ローム凝理層)
- 8 YLU (休塚層上部)
- 9 YLB (休塚層下部)
- 10 Ysc2 (休塚層下部スコリア)
- 11 YLL (休塚層下部)
- 12 SC I (第 I スコリア層)
- 13 BB I (第 I 黒色帯)
- 14 NL a (ニセローム層上部)
- 15 NL b (ニセローム層下部)
- 16 BB II (第 II 黒色帯)
- 17 SC II (第 II スコリア層)
- 18 BB III (第 III 黒色帯)
- 19 SC III a1 (第 III スコリア層第 1 スコリア帯)
- 20 SC III a1 (第 III スコリア層第 1 黒色帯)
- 21 SC III a2 (第 III スコリア層第 2 スコリア帯)
- 22 SC III a2 (第 III スコリア層第 2 黒色帯)
- 23 SC III a4 (第 III スコリア層第 4 スコリア帯)
- 24 BB IV (第 IV 黒色帯)



第116図 富沢内野山Ⅲ北遺跡基準土層図

はこの第 I 黒色帯に設定されている。

14・15層はニセロームである。略号はNLである。富沢内野山Ⅰ西遺跡と同様、スコリア質が特徴的なニセローム層上部(NL a)と、始良丹沢広域火山灰(AT：微小な天然ガラス)を多く含むニセローム層下部(NL b)に分離している。

16層は第II黒色帯である。略号はBB IIである。

17層は第IIスコリア層である。略号はSC IIである。

18層は第III黒色帯に該当する。略号はBB IIIである。

19～23層は第IIIスコリア帯に該当し、上層から第IIIスコリア帯第1スコリア帯・第IIIスコリア帯第1黒色帯・第IIIスコリア帯第2スコリア帯・第IIIスコリア帯第2黒色帯・第IIIスコリア帯第4スコリア帯と5層に分層されている。富沢内野山Ⅰ西遺跡では旧石器時代第Ⅰ文化層がこれに該当する。

24層は第IV黒色帯に該当する。略号はBB IVである。

第2節 旧石器時代の遺物

1 概要

富沢内野山Ⅲ北遺跡の範囲に含まれるC R36地点1区・2-1区・2-2区・2-3区・4区・7-1区の内、旧石器時代の遺物を確認したのは、2-2区AY列以南の区域である。礫と石器の散布が確認されたのみで、礫群は確認出来なかった。付近の平坦地の標高値(休場層上層上面)は約180m前後で、南東方向へ向かって緩やかに傾斜するが、1区付近の地形は富沢内野山Ⅰ西遺跡1・2区が位置する支谷へ向かって傾斜し始める。この1区は富沢内野山Ⅰ西遺跡1区に近接している。富沢内野山Ⅰ西遺跡1区における旧石器時代の遺構・遺物は、第Ⅰ黒色帯に位置する第Ⅱ文化層中の石器・礫、また休場層上層に位置する第Ⅲ文化層中の1号礫群及び2号礫群である。一方、当該遺跡における旧石器時代の遺構は見られず、遺物も甚少である。

2 遺物

旧石器時代の石器は尖頭器2点のみである。礫は第117図で示したように1区に赤化礫が散見される。

(1) 尖頭器(第117・118図 第26表 写真図版50)

1は2-2区AX34グリッドで出土した。石材はガラス質黒色安山岩である。中央付近で折損しており、先端部が失われている。両面共に素材面が残る。表面は基部付近、裏面は縁辺のみを調整する。縦長剥片を利用したものか。

2は1区AU39グリッドで出土した。石材はホルンフェルスである。中央部付近で折損しており、先端部が失われている。両面共縁辺を中心に剥離調整を施している。

第26表 旧石器時代石器一覧表

採掘番号	写真図版番号	遺物番号	層位	器種	石材	グリッド	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	X座標	Y座標	Z座標
1	50	6058	FB	尖頭器	ガラス質黒色安山岩	AX-34	(4.28)	2.71	0.81	8.56	-91825.828	36293.514	179.325
2	50	2236	YLL	尖頭器	ホルンフェルス	AU-39	(3.27)	3.03	0.95	12.97	-91855.681	36340.726	176.069

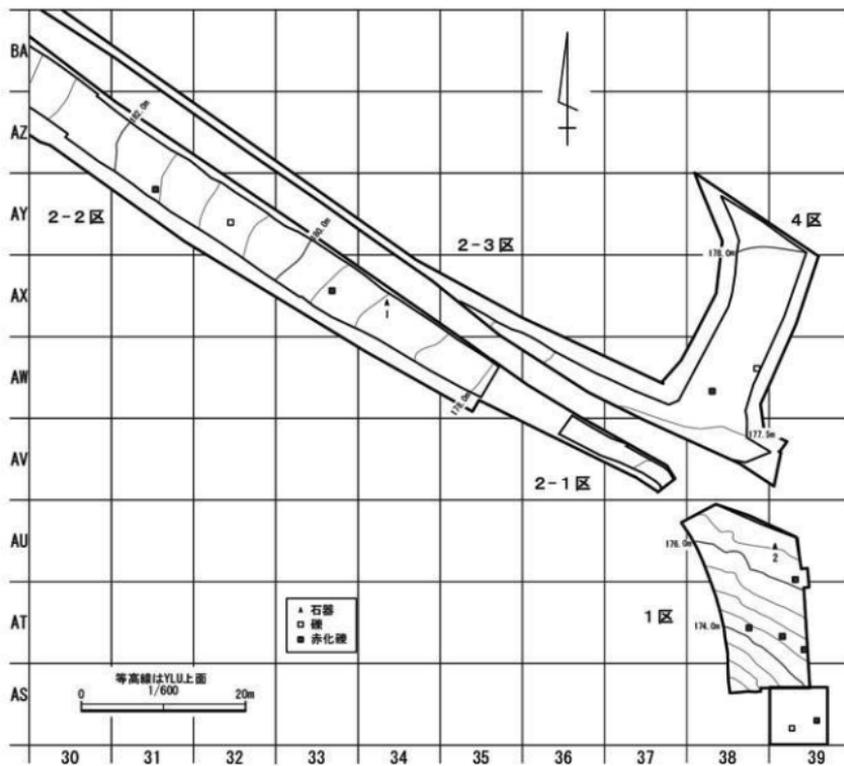
第27表 旧石器時代礫一覧表

遺物番号	層位	石材	礫形態	グリッド	被熱	完形	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	X座標	Y座標	Z座標
28	YLM	-	-	AS-39	-	-	4.6	3.5	0.8	20	-91877.937	36342.752	173.650
1227	YLU	輝石安山岩	歪角	AS-39	○	○	4.8	4.0	1.6	30	-91876.999	36345.764	173.330
2286	YLU	輝石安山岩	歪角	AT-39	○		3.5	3.0	2.1	20	-91866.699	36341.622	174.660
2287	YLU	玄武岩	歪角	AT-39	○	○	7.3	6.3	5.3	270	-91868.328	36344.290	174.757
2357	YLM	玄武岩	歪内	AU-39	○		7.4	4.8	2.5	70	-91859.729	36343.199	175.937
2558	YLU	輝石安山岩	歪角	AT-38	○	○	5.5	3.6	3.5	60	-91865.651	36337.581	174.264
3057	SC I	輝石安山岩	歪角	AY-32			8.3	5.6	2.2	60	-91816.012	36274.504	179.376
3077	YLU	-	-	AW-38	-	-	-	-	-	-	-91836.667	36333.086	177.676
3078	YLU	輝石安山岩	歪角	AW-38			10.1	7.2	4.9	270	-91833.909	36338.527	177.729
6061	YLU	多孔質玄武岩	歪角	AY-31	○	○	6.1	5.5	3.8	90	-91811.977	36265.363	181.490
6069	YLM	玄武岩	歪角	AX-33	○		11.1	7.4	4.4	340	-91824.380	36286.839	178.990

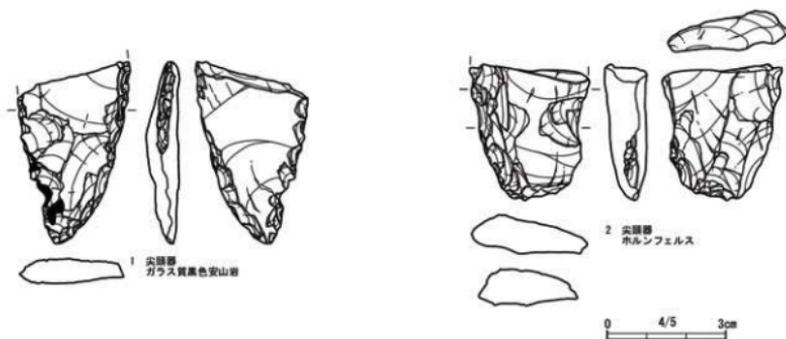
「-」は計測不能或いは不明

第28表 旧石器時代礫属性表

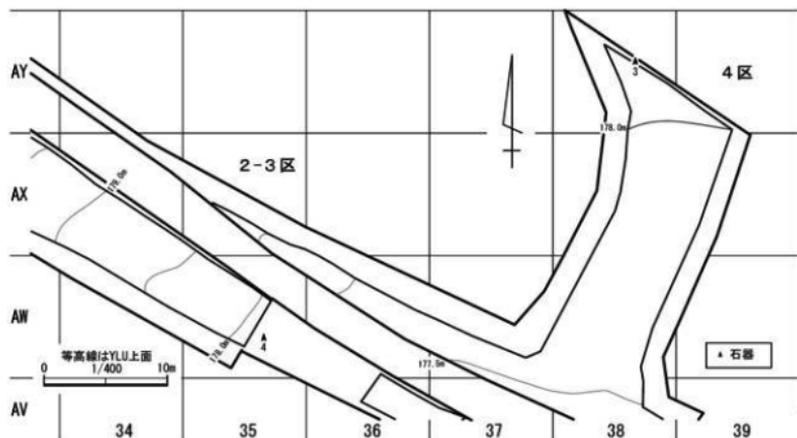
礫群番号	構成礫数	赤化				形態		石材				
		赤化	非赤化	非完形		歪角	歪内	玄武岩	多孔質玄武岩	安山岩	輝石	
				赤化1	赤化2							
遺構外	9	4	2	2	1	8	1	3	1	5		



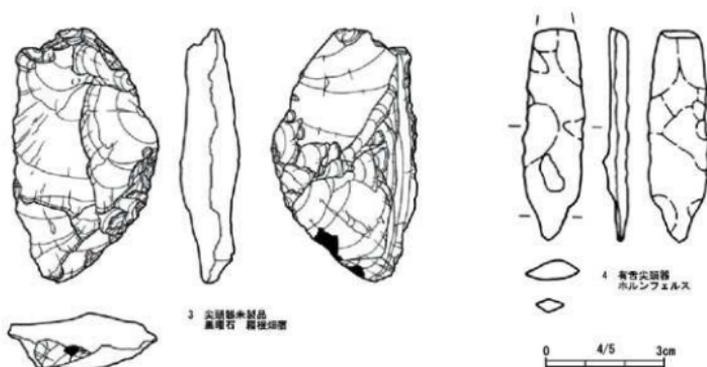
第117図 旧石器時代石器出土状況



第118図 旧石器時代石器



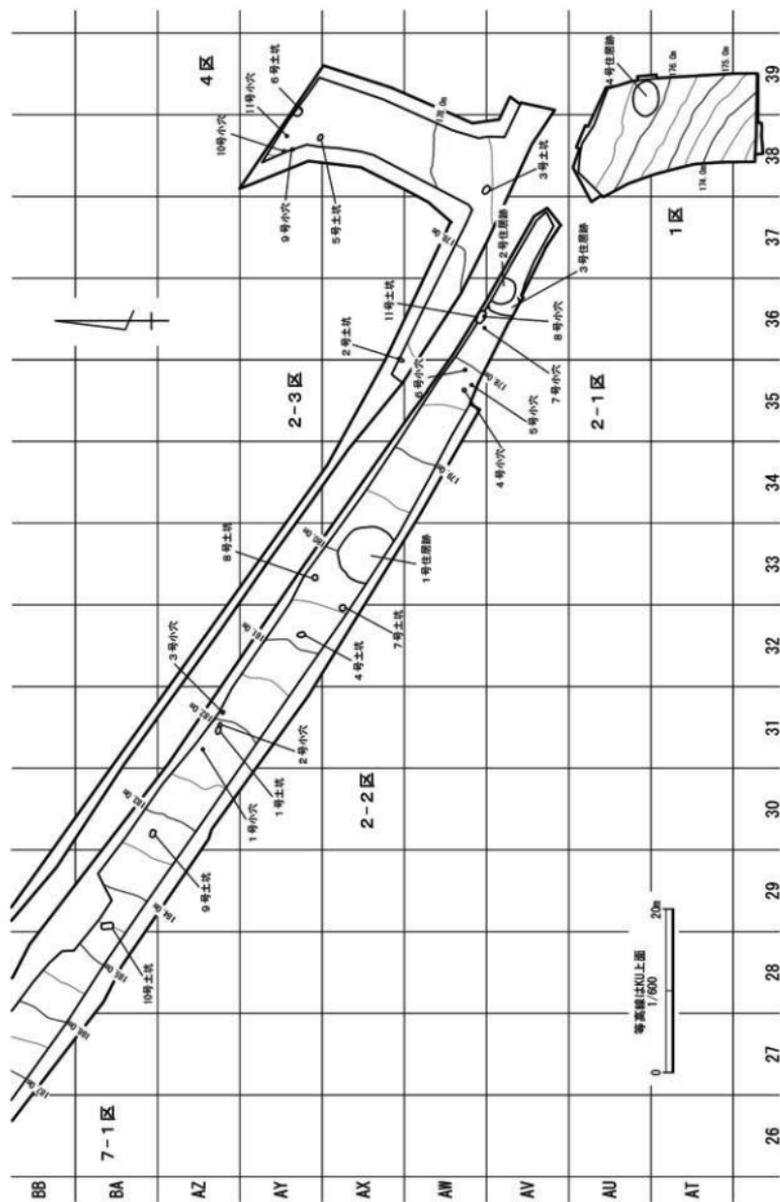
第119図 縄文時代草創期石器出土状況



第120図 縄文時代草創期石器

第29表 縄文時代草創期石器組成表

			尖頭器 未製品	有尖頭器	計
黒曜石	箱根燧石	MHJ	1		1
	黒曜石片		1		1
ホルンフェルス		Hbr		1	1
計			1	1	2



第121図 縄文時代遺構位置図

第3節 縄文時代の遺構と遺物

1 概要

(1) 遺構

富沢内野山Ⅲ北遺跡で縄文時代の遺構が確認されたのは、1区・2-1区・2-2区・2-3区・4区である(第121図)。前節でも述べたように遺跡帯は南東方向へ緩く傾斜する平坦地であるが、富沢内野山Ⅰ西遺跡1区・2区が位置する支谷へ継続する斜面地となるのが、当該遺跡の1区となる。遺構は地形の変換点となる1区北半部A T39グリッド付近からB A28グリッド付近まで約120mの範囲内に確認される。遺構は住居跡4軒と土坑11基及び小穴11基が確認されている。当該遺跡を特徴づけるのが縄文時代中期代の住居跡(1~4号住居跡)である。

(2) 遺物

当該遺跡で確認された縄文時代の遺物は草創期から後期に位置付けられる。隣接する富沢内野山Ⅰ西遺跡では草創期前半の隆帯土器、草創期後半の押圧縄文土器や表裏縄文土器等、尖頭器類が大量に出土しているが、草創期の遺物は当該遺跡では尖頭器類2点に過ぎない(第119・120図 第29表)。当該遺跡を特徴づけるのが縄文時代中期の土器群である。この遺跡が位置する尾根の先端部に、該期集落遺跡である尾畑遺跡が位置している点から、関連性がまず想起される。

なお第2図で理解できるように、周知の埋蔵文化財包蔵地である当該遺跡と富沢内野山Ⅰ西遺跡は、A P・A Q33~37グリッド付近で重複している。地形的に前者が尾根上、後者が谷地形内という区分のみで、遺跡を分つ強制力の伴う地形的な制約は見られない。厳密に区分するには更に煩雑な作業が伴うため、富沢内野山Ⅰ西遺跡の縄文時代中期遺物の一部を当該遺跡で取り扱うこととした。従って当該遺跡1区に隣接する富沢内野山Ⅰ西遺跡テストピットA S39、1区にて出土した遺物の一部について、本章で触れる。なお土器については池谷信之氏・小崎 晋氏に指導を受けた。

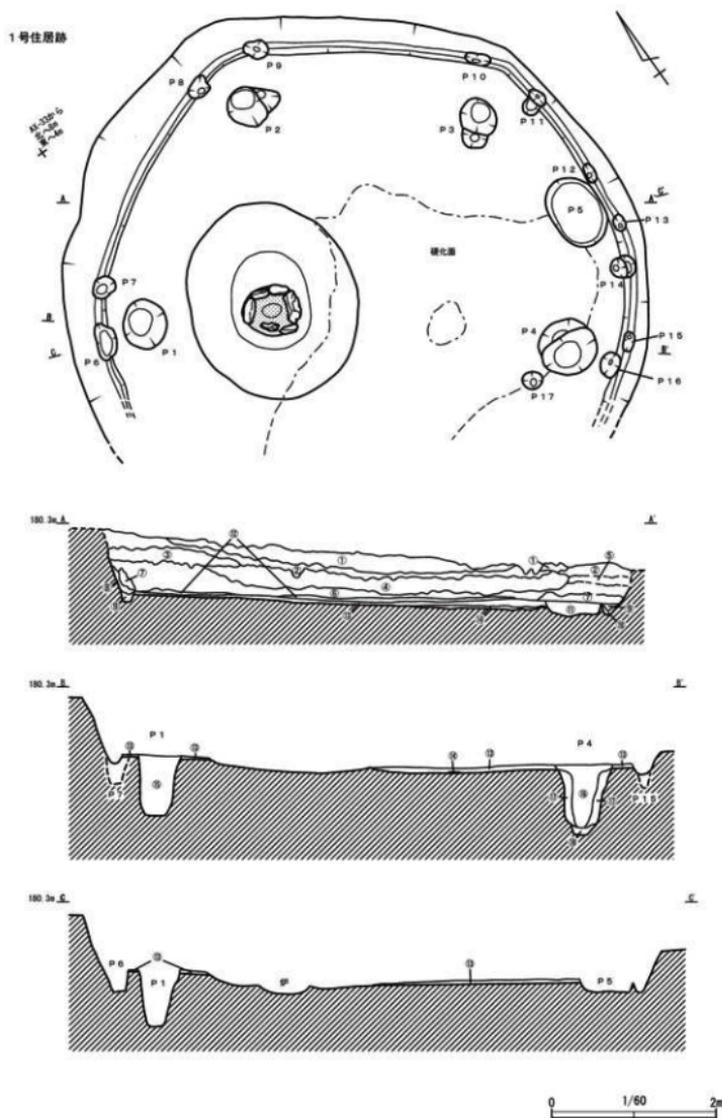
2 遺構と遺構内出土遺物

(1) 住居跡

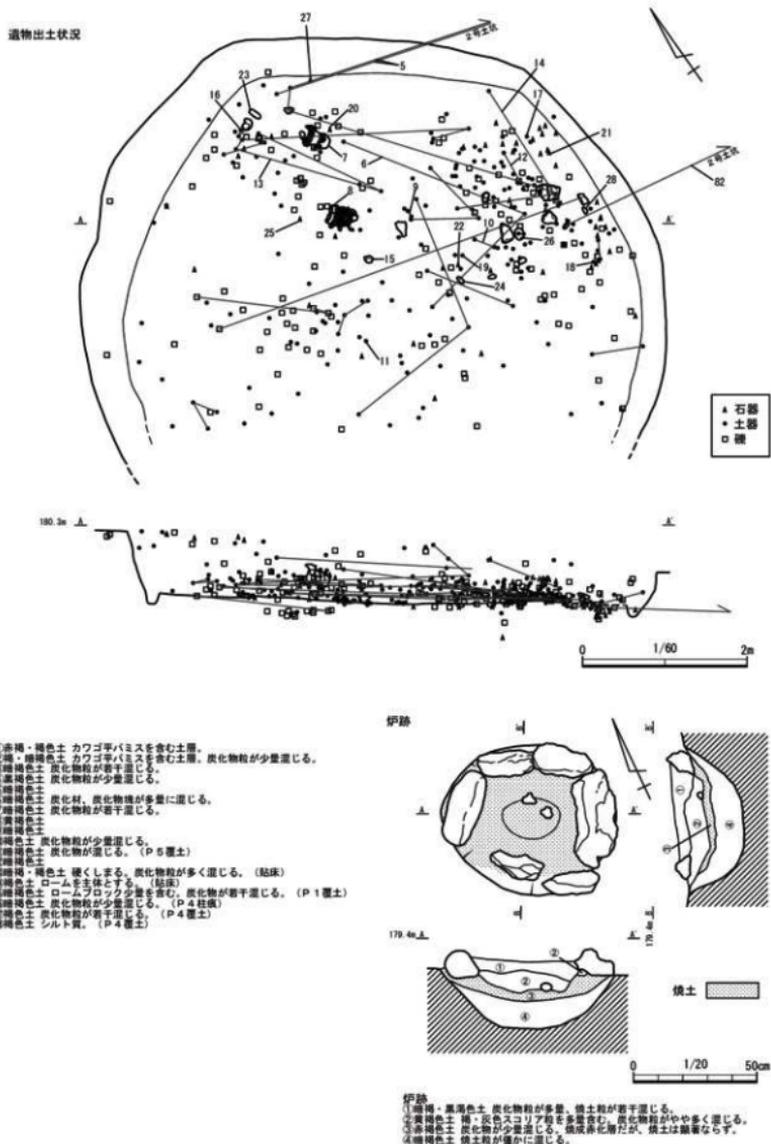
1号住居跡(第121~126図 第30・32・33表 写真図版47・50・51)

当該住居跡は2-2区A X33グリッドに位置する。調査区南壁際で確認され、住居跡の一部は調査区外へ延びる。平面形はやや不明瞭ながらも六角形を呈していたと考えられ、住居跡としても大型で、最大径は7.08m、確認面から貼床面までの最大高低差は0.70mである。土層堆積状況からの住居跡は栗色~富士黒土層上面から掘り込まれていたと推定される。覆土の最上層である1・2層にはカワゴ平パミスが、覆土下位の主体と成す6層には炭化材・炭化物粒が大量に含まれている。13・14層は住居の貼床土と考えられる。11層は住居内P5の覆土で、住居機能時には覆われていた可能性がある。

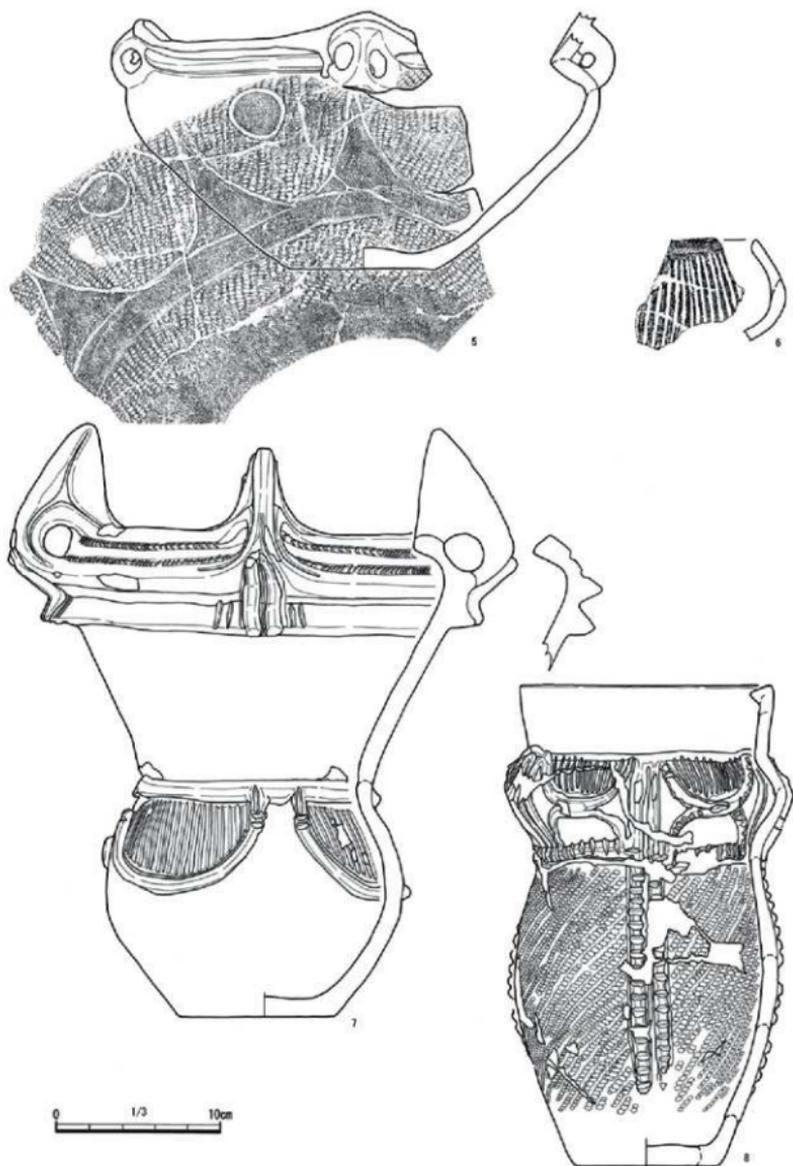
この住居跡内には壁溝・壁溝内小穴・主柱穴・炉跡等が認められる。1号住居跡の設計は六角形を基調としたものと考えられ、検出された壁溝は六角形の頂点付近で屈曲し、屈曲部付近に壁溝内小穴が2基対になって設けられている。その対の壁溝内小穴に対向する位置に主柱穴が認められる。主柱穴はP2~4のように一度再設定された可能性があり、その深さは貼床面から約70~90cmである。壁溝内小穴の平面形は円~楕円形を呈し、最大径約20~40cm、深さは約20~30cmと小規模である。また六角形の頂点に位置するP3・10・11とP4・14・15の間に、壁溝内小穴P12・13及び土坑P5が位置している。P5・12・13付近から炉跡方向に硬化面が検出されているので、住居内への出入・昇降施設であった可



第122図 縄文時代1号住居跡



第123図 縄文時代1号住居跡遺物出土状況

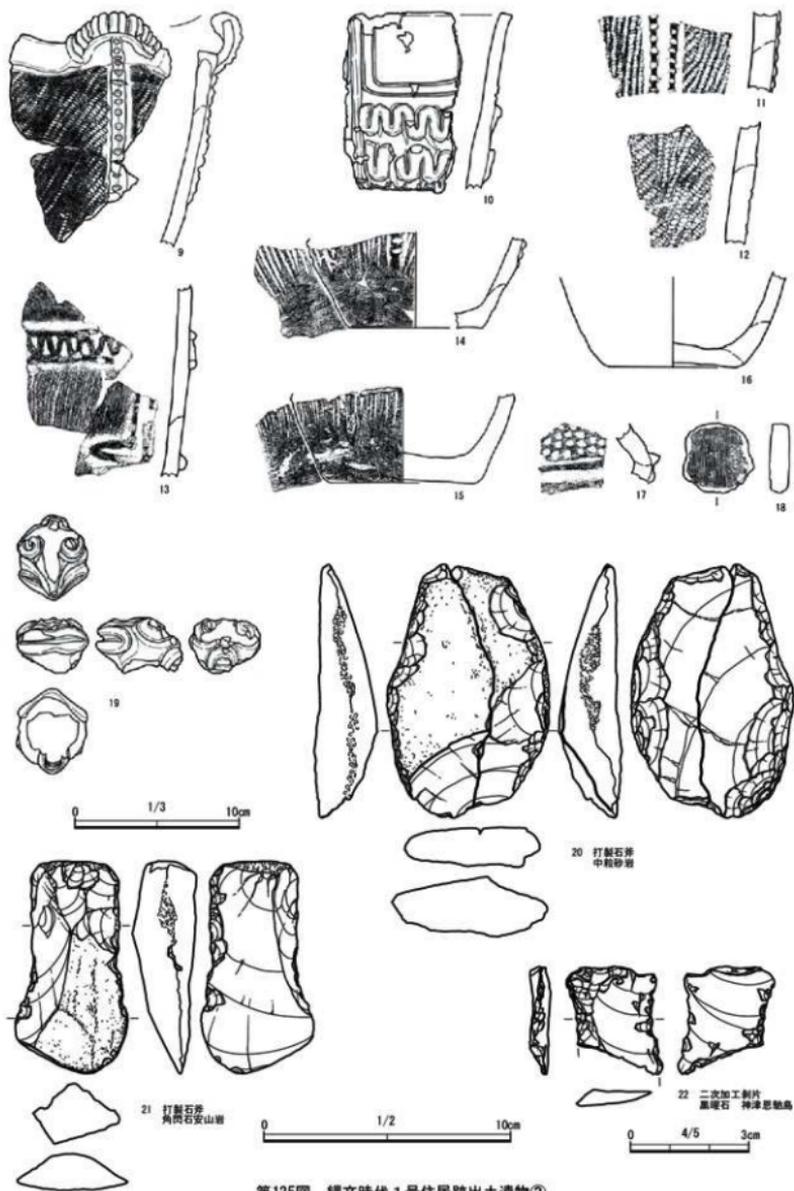


第124図 縄文時代1号住居跡出土遺物①

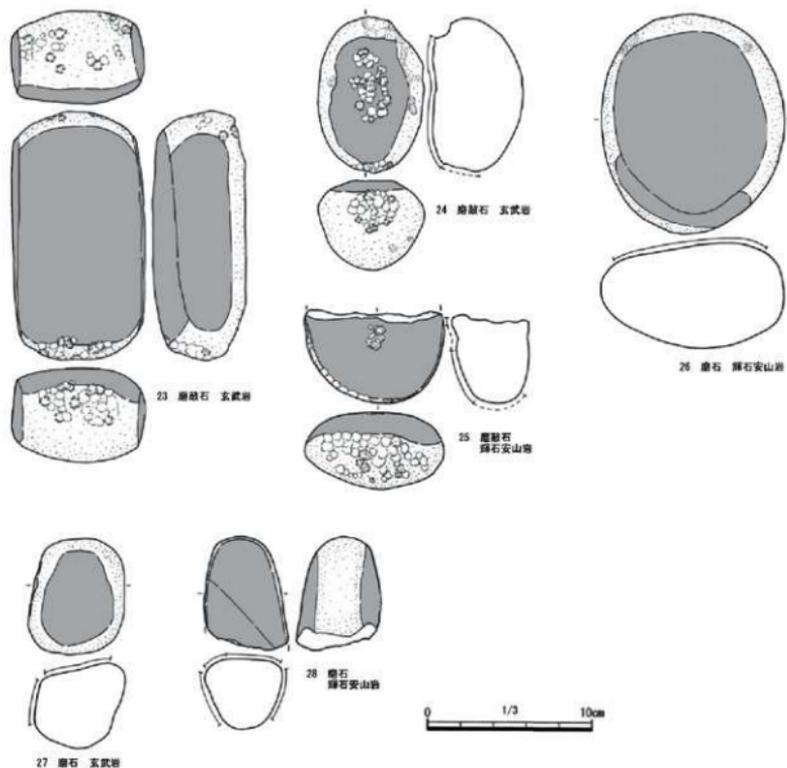
能性を想起させる。炉跡は住居跡中央部からやや六角形の頂点付近P1寄りの位置に設えられている。平面は楕円形で、長径0.71m、短径0.62mを測る。炉跡には礫を6個巡らせている。炉跡周囲の床面は僅かに窪み、貼床は確認されていない。その炉跡を中心として窪む床面は長径2.44m、短径1.97mを測る楕円形を呈する。

当該住居跡から多くの土器・石器が出土しているが、図示し得たのが土器等15点、石器9点である。5～19は縄文土器で、縄文時代中期の第Ⅲ～Ⅴ群に伴うものである。5は深鉢の胴部下半部の資料である。平坦な底部から外傾しながら立ち上がり、大きく内湾して器形を窄ませ、また直線的に立ち上げようとする。窄まる部位に眼鏡状の突起を設けた後、隆帯を巡らせている。隆帯から底部の間にはほぼ全面に縄文を施した後、円形、弧状及び横位に沈線文により区画し、その間隙は縄文を磨り消している。また底部上位付近は区画沈線文を施さず、縄文を磨り消している。隆帯より上位は割れ面を丁寧に研いで、口縁部を作出している。隆帯付近に赤彩の痕跡が残る。この5は2号土坑で出土した破片資料と接合したものである。6は口縁部だけの破片資料である。大きく内湾する口縁部で、外面に条線が縦位に施されている。7はほぼ完形の深鉢である。覆土4層からの出土である。平坦な底部直上で器形が膨らみつつ窄め、その後直線的に立ち上げ、口縁部付近は内折させる。口縁部には眼鏡状突起を発達させたような突起を4ヶ所設け、沈線文をその正面及び側面に施す。突起毎の透かし穴を繋ぐように、口縁部には先端の鋭いへら状の工具で連続刺突列を2条施す。三角押文か。この文様帯の下位には鈎状に整形された隆帯が1条巡る。また胴部中位で窄まる箇所を隆帯を横位に貼り付け、更に半円形に粘土紐を貼り付け、その区画内に集合沈線文を施す。8は住居跡床面付近で出土している。胴部下半部を緩やかに内湾させ、胴部上位で窄ませて括れを作る。またそこから器形を膨らませたことで、その部位で胴部最大径を測る。口縁部は頸部から直立させ、口唇部を内折させている。口縁部には文様を施さず、丁寧にナデ調整を施す。頸部は指ナデにより浅い凹線文状をなす。頸部より下位には粘土紐を弧状に貼り付け、半円形の区画を上下2段設けている。その区画上段6箇所のうち、5箇所に集合沈線文を施して楕円文状に仕上げる。半円形の区画毎の間隙に縦位に、また胴部括れに横位に粘土紐を貼り付け、刻目文を施している。括れより下位、胴部下半部は縄文を施している。なお8を構成する破片2点に付着した炭化物につき、放射性炭素年代測定を行った結果、 $4,390 \pm 20\text{yrBP}$ 、 $4,340 \pm 20\text{yrBP}$ という結果が出た。9～19は破片資料である。9は突起を有する口縁部である。突起の頭部には細い粘土紐15本を貼り付け、また外面には弧状及び縦位の粘土紐を貼り付けて隆帯となす。この縦位の隆帯は胴部まで垂下させ、刻目文を施す。口唇部は平坦にし、口縁部は肥厚させ、丁寧にナデ調整を行う。その下位に突起に巡らせた弧状の隆帯に接続する沈線文を施す。胴部は縄文を施す。9に付着していた炭化物の放射性炭素年代は $4,400 \pm 20\text{yrBP}$ であった。10は平坦に仕上げられた口唇部直下に半截竹管状の工具で沈線文を施し、方形区画のパネル文をなす。その脇には縦位に粘土紐を貼り付け、またパネル文の下位には蛇行した粘土紐を2本貼り付け、それぞれ隆帯となす。11は縄文を施した後、2本の粘土紐を貼り付け、刻目文を施す。12は縄文のみを施す。13は細い粘土紐を横位・蛇行に施す。その下位には集合沈線文か。14～16は底部資料である。14・15は集合沈線文が認められる。17は刺突文が施されている。先端がやや尖った棒状の工具によるものか。18は土製円盤である。19は動物の頭部をあしらった土器裝飾部か。目が渦巻き状に貼り付けた細い粘土紐により表現され、また口も大きく幅をとる。

20～28は石器である。20・21は打製石斧である。前者が中粒砂岩、後者が角閃石安山岩を石材とし、両者とも主面に自然面が残置する。20は阿側縁に敲打を施すが、柄との緊縛痕は認められない。21は基端部と側縁の一部を敲打で整形している。22は二次加工剥片か。側縁に細かな剝離調整が施されている。23～28は磨礫石類である。23～25は磨礫石で、いずれも上下端部何れかに敲打痕が観察される。23はやや扁平な棒状の礫を利用する。側面と主面が磨り面として利用されている。24は卵形の楕円礫を利用し、



第125図 縄文時代1号住居跡出土遺物②

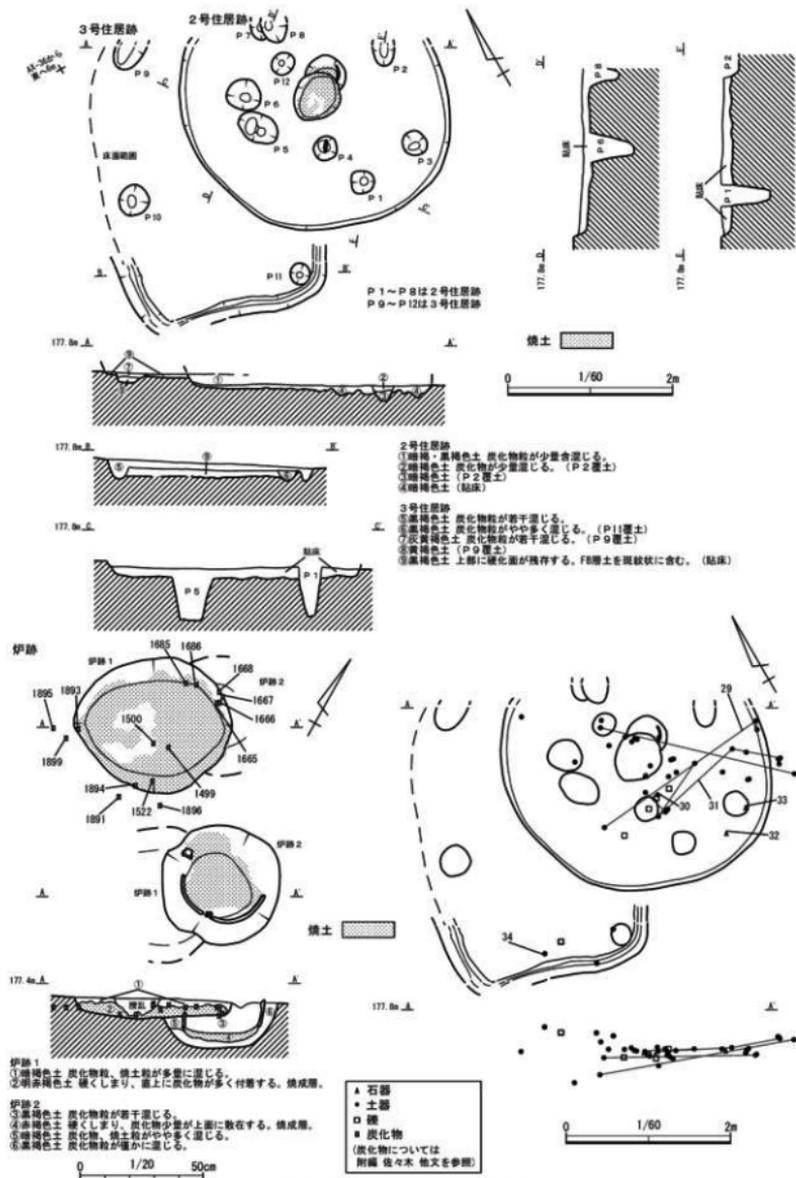


第126図 縄文時代1号住居跡出土遺物③

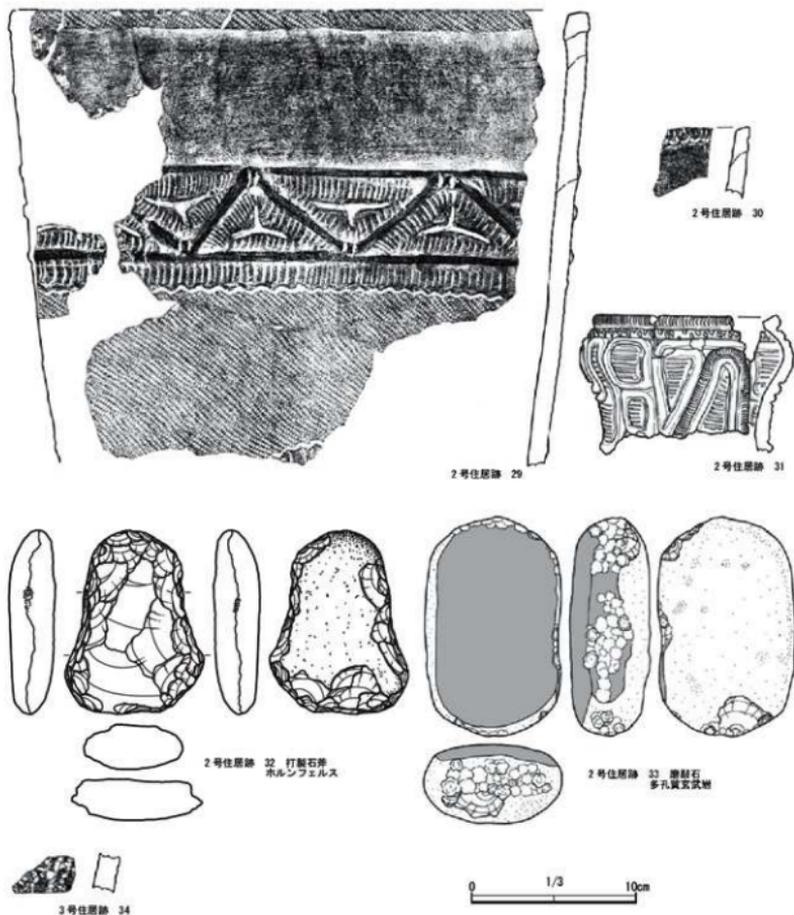
主面中央にも敲打痕が観察される。磨り面は主面のみである。25は扁平な円礮を利用したものであるが、折損している。主面が磨り面である。26～28は磨石である。26は円礮で、磨り面は主面のみである。27は重角礮で、磨り面が2面数えられる。28は断面が三角形を呈している。

2号住居跡(第121・127・128図 第30・32・33表 写真図版45・46・52)

当該住居跡は2-1区AV36グリッドに位置する。住居跡が確認されたこの調査区は狭長で、住居付近の地形が判然としない。しかし2-3区及び1区の地形から勘案すれば、2号住居跡は尾根上平坦地の南際付近と考えられる。住居北半部は調査区外へ広がり、部分的な検出に止まっているが、円形を呈する住居跡と考えられる。この住居跡の最大径は3.28m、検出された深さは0.10mである。3号住居跡と重複し、時期的には後出するものと考えられる。この住居跡には炉跡と柱穴が確認され、壁溝は確認出来ていない。貼床が認められ、貼床除去後にその存在を確認した柱穴があり、また炉跡も2基確認されているため、住居が建て替えられた可能性がある。この住居跡の柱穴と考えられるのがP1～8であ



第127図 縄文時代2・3号住居跡



第128図 縄文時代2・3号住居跡出土遺物

る。炉跡は2基重複して確認された。平面が楕円形を呈する炉跡1は長径0.64m、短径0.55mを測る。また平面が円形を呈する炉跡2は最大径0.47mを測る。時期的には炉跡2を破壊して炉跡1を構築しており、この炉跡1は時期的に後出するものである。1・2号炉跡には1号住居跡で見られた礫の配置は認められなかったが、炉跡2は土器を据え置いた埋甕炉であった。なお炉跡から炭化種実が採取され、分析がなされている。詳細は附編を参照されたい。

2号住居跡から土器・石器が出土しているが、図示し得たのが土器3点、石器2点である。29～31は縄文土器である。29は炉に埋設されていた土器で口縁部から胴部中位にかけての資料である。直線的に立ち上がり、口縁部を肥厚させている。口唇部は平坦に仕上げ、外面口唇部直下には縄文を施している。土器中位付近に粘土紐を横位に並べて貼り、またその間隙に斜位の粘土紐を貼り、それぞれ低平な隆帯となした上で、三角形のモチーフを表現する。その三角形内部は所謂キャタピラ文と三叉文を施す。更に三角区画文帯の直下にキャタピラ文、横位の波状文を施す。波状文より下位に縄文が施されている。胎土中の金雲母が目立つ。縄文時代中期の藤内式か。30は口縁部細片である。平坦に仕上げられた口唇部直下に三角押文か。31は口縁部から胴部中位まで残存する。胴部上位が膨らみ、胴部中位は括れる器形である。口唇部は爪形文、胴部は所謂パネル文か。32・33は石器である。32は打製石斧である。撚形を呈し、自然面が残存する。柄を緊縛したであろう中央部側縁部付近には敲打痕が認められる。ホルンフェルスを石材とし、全体的にやや風化が進む。33は磨敲石である。多孔質玄武岩を石材とし、上下端部及び側面に敲打痕があり、磨り面は主面片側と側面を利用する。

3号住居跡(第121・127・128図 第30・32・33表 写真図版45・46)

当該住居跡は2-1区AV36グリッドに位置する。前述の2号住居跡と重複し、時期的にはこの3号住居跡が先行する。住居跡の北端部は調査区外に延び、南端部は調査区南壁と接している。確認されたこの住居跡は貼床部のみが残存しており、南半部付近に壁溝が巡るのを確認している。この壁溝の検出状況から、3号住居跡は長方形を呈していたものと考えられる。住居跡の柱穴と考えられるのはP9～11及び2号住居跡内に位置するP12である。炉跡は確認できなかった。

当該住居跡から土器・石器が数点出土している。34は井戸尻式土器の細片か。

4号住居跡(第121・129～132図 第30・32・33表 写真図版44・45・53・54)

当該住居跡は1区AT39グリッドに位置する。栗色～富士黒土層上面にて確認された。この住居跡の平面は楕円形を呈し、長径4.28m、短径3.10mを測る。この住居跡が位置する1区の平坦地は、富沢内野山1西遺跡1・2区が位置する支谷へ地形が転換する区域にあたる。この楕円形を呈する住居跡の長軸はほぼ東西方向に延び、1区の等高線とほぼ平行しており、地形を意識した住居が設定された可能性を持つ。

この住居跡内には柱穴と炉跡が確認され、壁溝や貼床は確認されていない。住居の主柱穴と考えられるのがP1・2・4・6で、深さは0.55～0.70mを測る。他のP3・5・7は掘り込みが浅いため主柱穴とは考えにくい。炉跡は住居跡中央部からやや東寄りの位置に設けられている。平面は楕円形で長径0.82m、短径0.64mを測る。炉跡内に3点の礫が「コ」の字状に据えられている。なお炉跡から炭化種実が採取され、分析がなされている。詳細は附編を参照されたい。

当該住居跡から多くの土器・石器が出土しているが、図示し得たのが土器30点、石器17点である。35は縦位に楕円文が施されている。胎土中の金雲母が目立つ。36・37は条痕が施されている。前者は表裏面、後者は内面のみに条痕が施されている。これら3点は縄文時代早期のものである。

38～62は縄文時代中期代の所産と考えられる。そのうち新道式は38～40で、それ以外の資料の殆どが

藤内式と推定される。38は口縁部のみの破片資料で、直線的に立ち上げ、口唇部は平坦に仕上げている。細い半截竹管状の工具で長方形を描き、その内側に沿って、先端の鋭いヘラ状の工具で連続刺突して三角押文とする。三角押文の四角形区画内はそれと同一工具の刺突と共に、細い竹管状の工具による刺突により文様が充填されている。四角形区画の下位にはキャタピラ文か。39も口縁部のみの破片資料である。口縁部は内折の後、さらに上方へ折り曲げている。口唇部には渦状の突起が貼り付けられている。突起から細い粘土紐を弧状に貼り付け、半円形の区画を作る。その区画の下位にも粘土紐を貼り付け、三角形の区画を設ける。区画内にはキャタピラ文や三角押文が充填される。40は沈線文と三角押文が施された胴部の破片資料である。41～43は口縁部のみの破片資料である。これらは平坦に仕上げられた口唇部をもつ。41は口唇部直下に縄文、さらに斜位にキャタピラ文が施されている。キャタピラ文の両脇は細い竹管状の工具で刺突。42は口唇部直下に半截竹管状の工具で平行沈線文を斜位に施した後、指頭で円形、連弧状に磨り消しをしている。43は縄文を施した後に、区画の沈線文や波状文を施している。44～56・60は胴部のみの破片資料である。44・45は半截竹管状の工具により施された隆線文の沈線文で四角形の区画を設け、前者はキャタピラ文、三角押文、三叉文を、後者はキャタピラ文、三角押文、縦位の沈線文を充填している。46は低い隆帯を基調に、キャタピラ文及び波状文等が沿うように施されている。低い隆帯上には縄文を施した部位もある。47～49・51～53は三角押文若しくはキャタピラ文と低い隆線文を基調とした文様が施された胴部のみの破片資料である。50は低く幅広い隆帯に2本の隆線が接続する。隆帯上は先端が平坦であり尖らせていない工具で押引文を施す。また隆帯と隆線の脇は三角押文を施している。55・56は縄文が施されている。60は低い隆線文のみ確認される。隆線文の貼り付けの後に、ほぼ全面指頭によるナデか。54・57・58・61・62は底部付近の資料である。54は胴部下端から底部にかけての資料である。57・58は胴部中位から底部まで残存した資料で、平坦な底部から胴部を直線的に立ち上げている。57は縄文を施した後に、キャタピラ文及び三角押文を横位に施している。58には文様は施されていないが、粘土紐積み上げ痕や指頭痕がナデ消されずに明瞭に観察できる。61・62は小型の深鉢の底部か。59は型式名が判然としない口縁部のみの破片資料である。新道・藤内式と比較して器厚は薄く仕上げられている。口唇部は半截竹管状の工具で押引文が施され、口唇部直下に同一工具によるものと推定される平行沈線文や刺突文が施されている。63・64は土製円盤である。

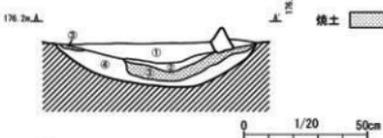
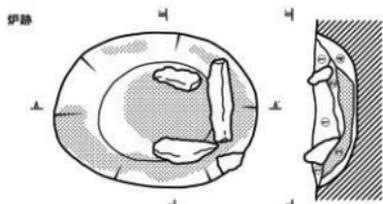
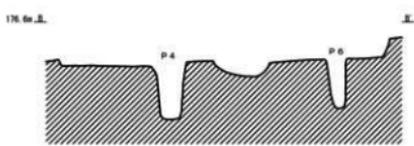
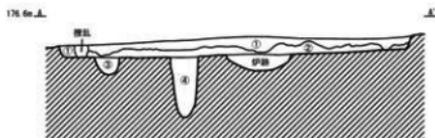
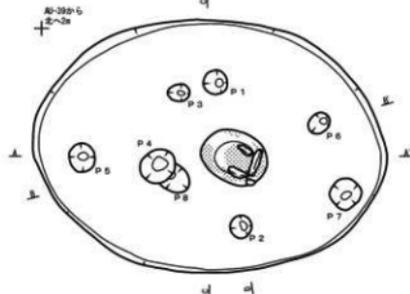
65～81は石器である。65は尖頭器である。ホルンフェルス石材とし、先端部が折損している。66～68は石鏃である。いずれも無茎鏃で、66・67は凹基、68は円基鏃か。66は67と比較して、抉りの入れ方が浅い。石材はガラス質黒色安山岩、天城柏峠産黒曜石、ホルンフェルスである。69～71は楔形石器である。いずれも神津島恩馳島産黒曜石を石材とする。端部には使用による潰れが見られる。72～77は打製石斧である。このうち完形品は74のみで、残りは折損している。72は基端部か。73・75は刃部か。74は撚形を呈し、両側縁部中位付近に敲打痕が観察される。緑色片岩を石材とし、節理面が残留する。76・77は刃部が折損した資料である。76は小型の短冊形打製石斧か。石材は白雲母片岩で、器厚も薄い。77は基部中位付近で折損している。78～81は磨石類である。78は両主面中央部に敲打痕、磨り面は上下端部を除く全ての面に観察される。79～81は磨石である。何れも上下端部を中心に敲打痕が観察される。78・81は玄武岩、79は中粒砂岩、80は輝石安山岩を石材とする。

(2) 土坑(第121・133・134図 第31・32表 写真図版46・48・49・54)

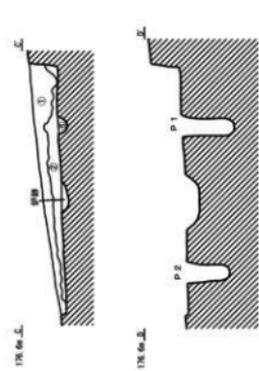
当該遺跡にて確認された土坑は11基を数える。これらの遺構は著しく偏在していないものの、2-2区B A29グリッドに位置する10号土坑より北東に遺構が未確認である点から、生活領域の辺線を示すものか。

確認された土坑は底面に小穴が認められないものが多数を占めている。1～5号土坑は平面が楕円～

4号住居跡

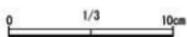
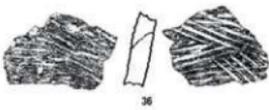
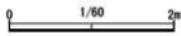


伊跡
 ① 赤褐色土 肌~厚層土を基調とする。炭化物粒多量、焼土粒若干が混じる。
 ② 赤褐色土 焼土粒が多量に混じる。
 ③ 赤褐色土 上面に炭化物粒が若干散在する。焼成層。
 ④ 赤褐色土 炭化物粒が若干混じる。

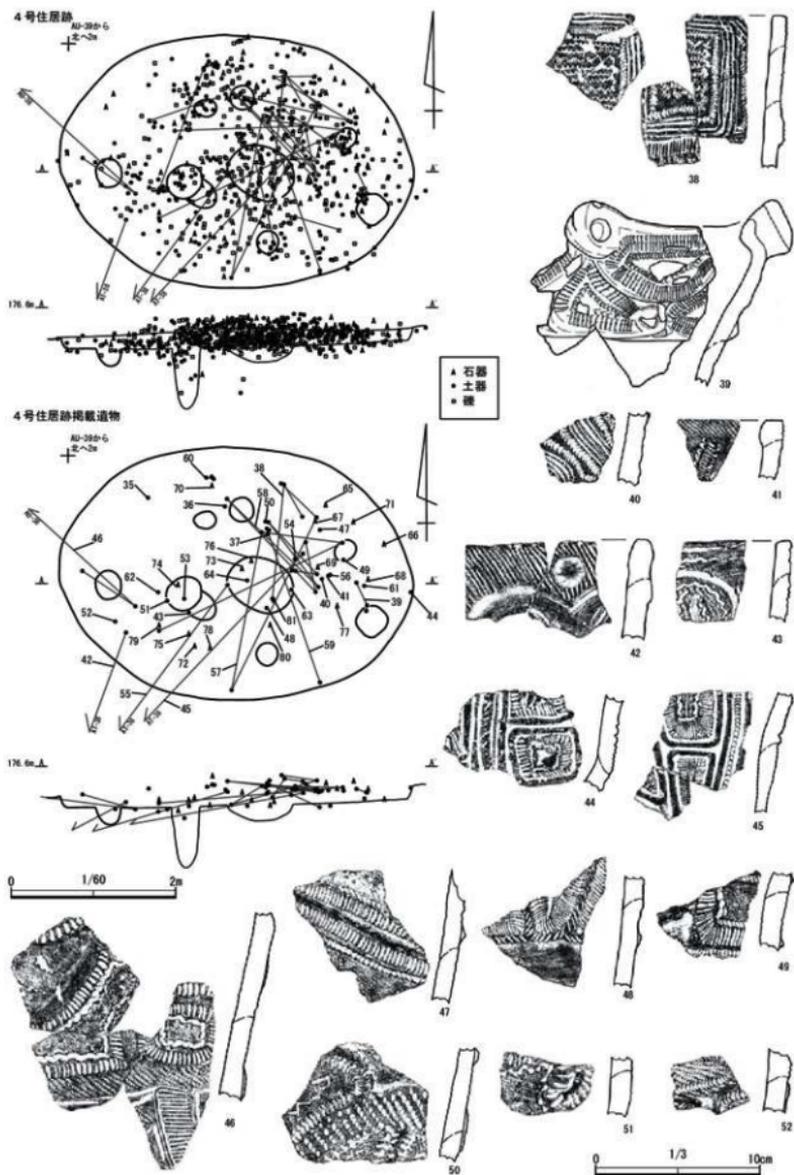


焼土

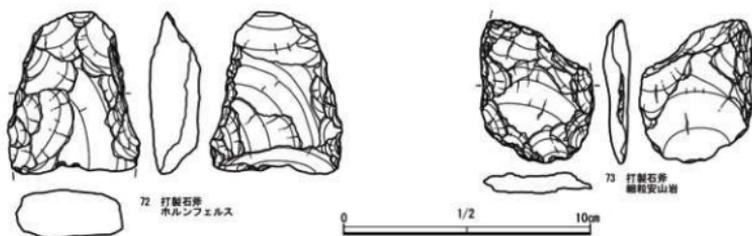
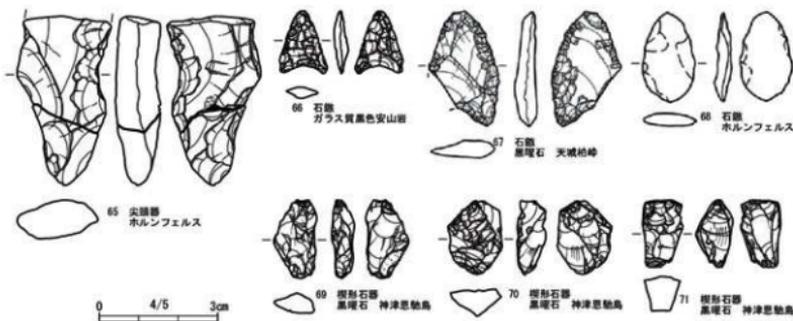
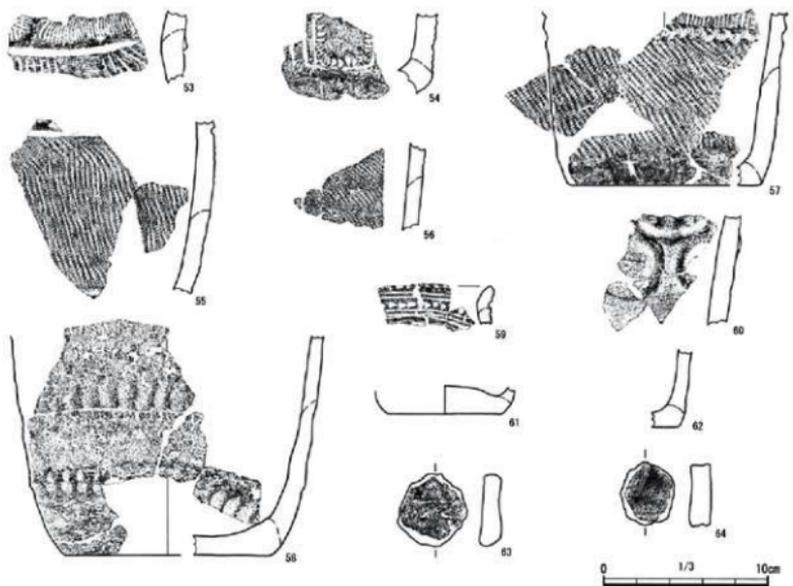
- ① 赤褐色土 炭化物粒が少量混じる。
- ② 褐色土 焼土粒が僅かに混じる。
- ③ 赤褐色土 (P4層土)
- ④ 赤褐色土 炭化物粒が少量混じる。(P4層土)
- ⑤ 赤褐色土 炭化物粒が微量混じる。(P1層土)



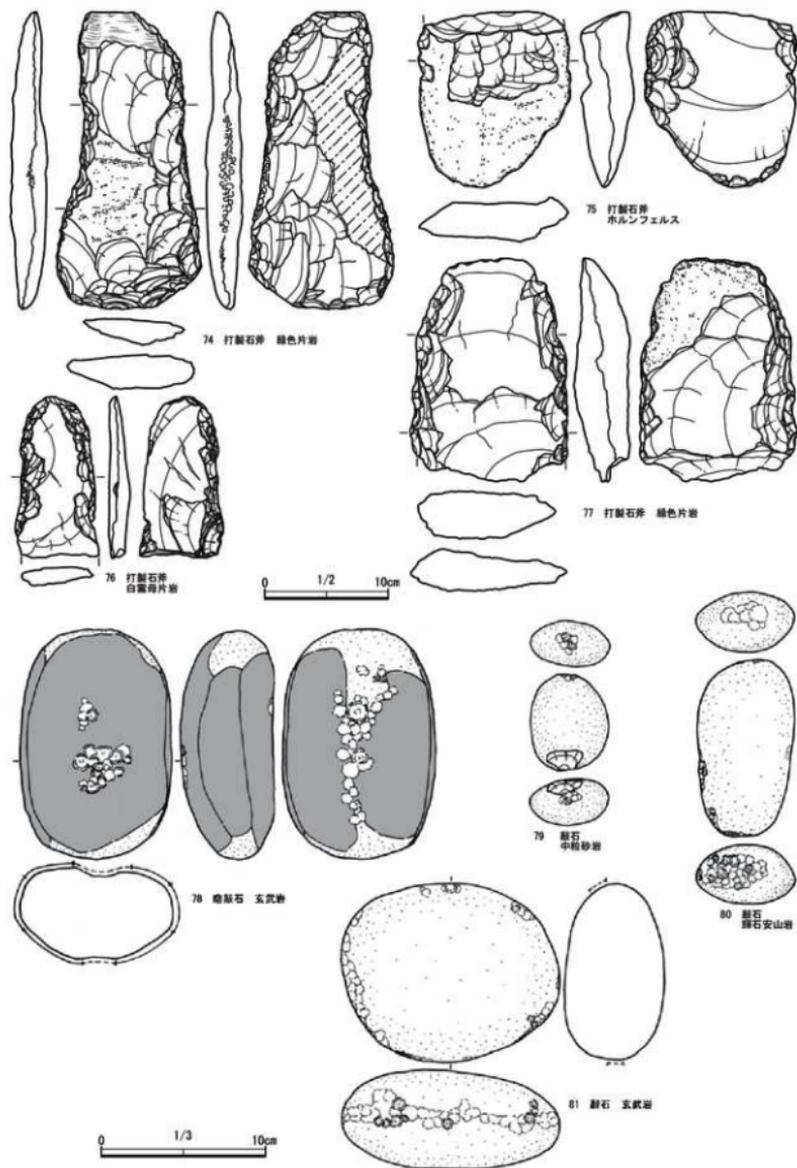
第129図 縄文時代4号住居跡と出土遺物①



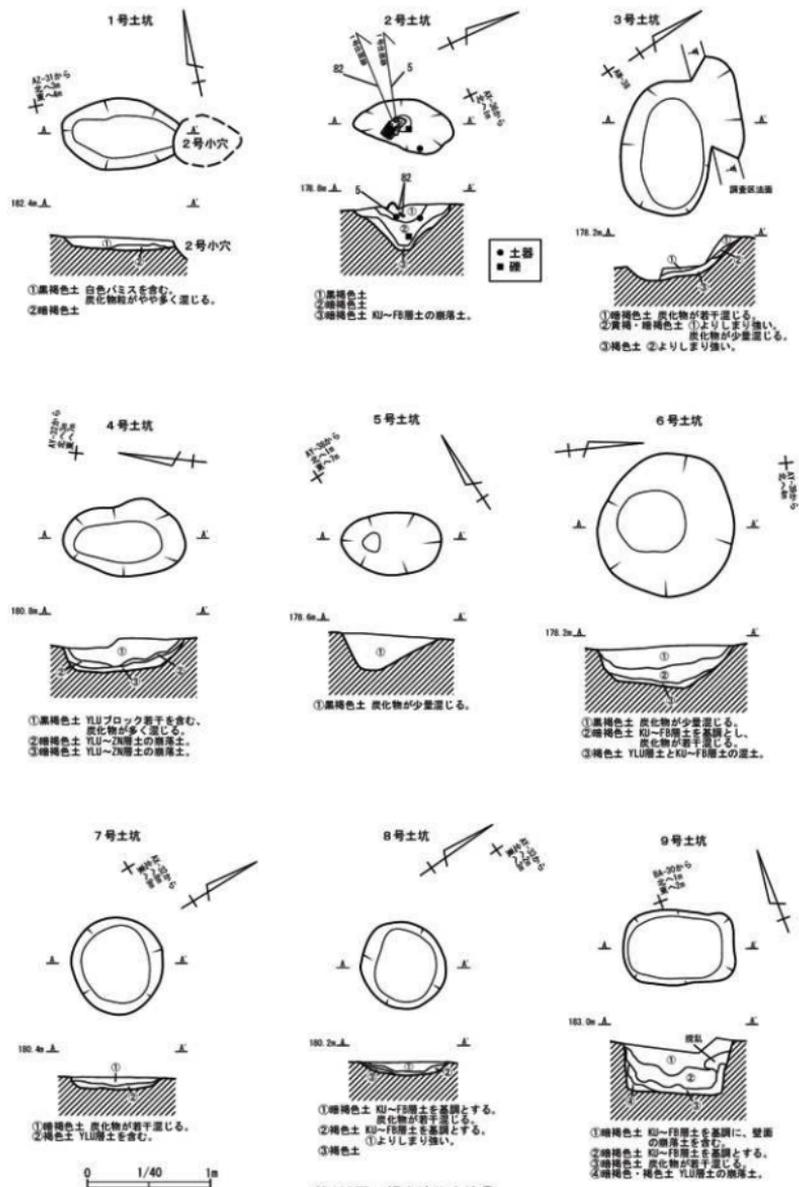
第130図 縄文時代4号住居跡遺物出土状況と出土遺物②



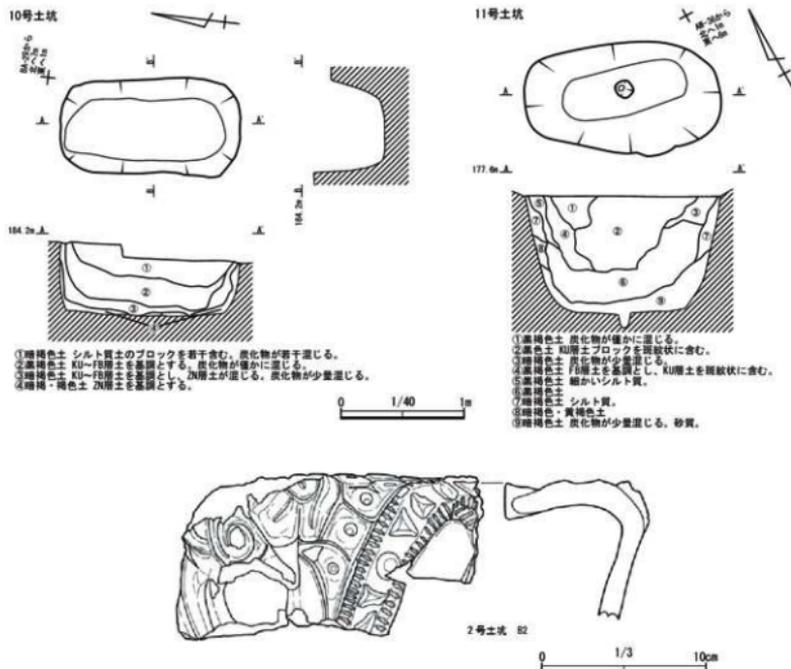
第131図 縄文時代4号住居跡出土遺物③



第132図 縄文時代4号住居跡出土遺物④



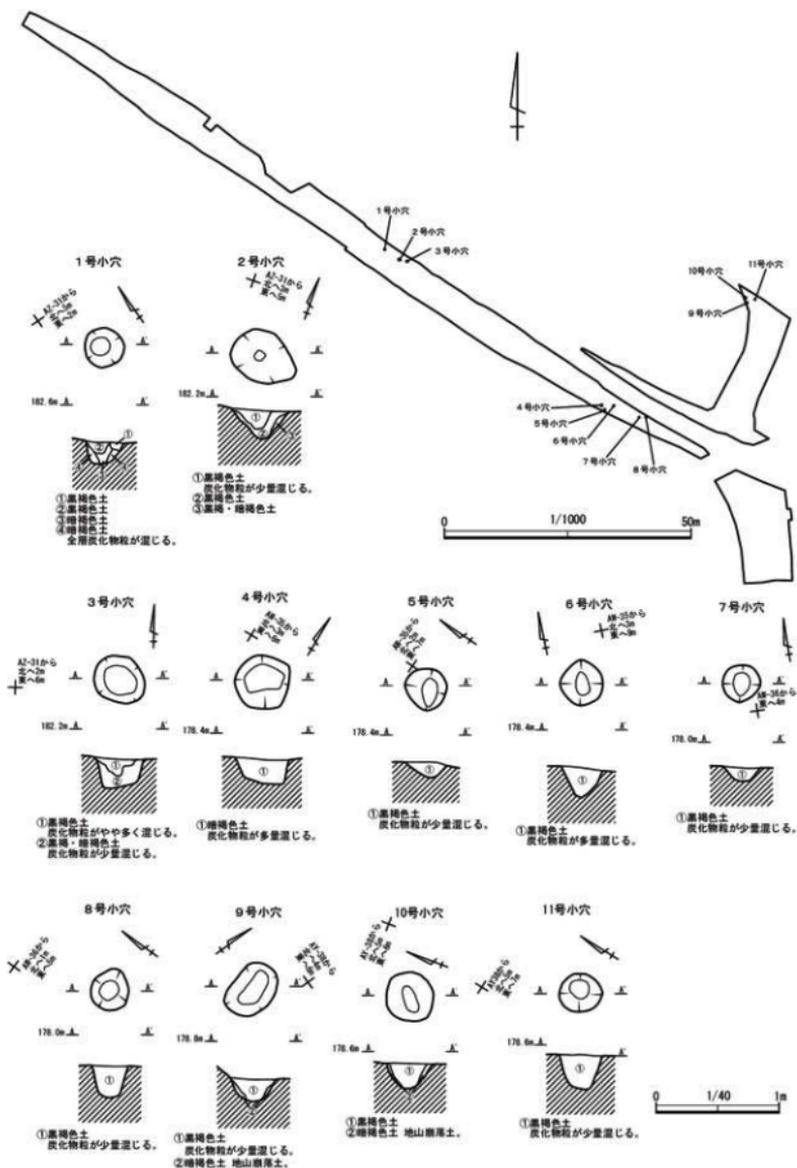
第133図 縄文時代土坑①



第134図 縄文時代土坑②と土坑出土遺物

紡錘形を呈するタイプであるが、底部の形状が多様である。1・3・4号土坑は平坦な底面を持つタイプである。1号土坑は2-2区AZ31グリッドに位置する。富士黒土層上面にて確認された。この土坑の長軸方向は東西を指向している。東端部を2号小穴が重複する。時期的に土坑が先行する。3号土坑は2-3区AW38グリッドに位置する。上端が大部分削平されていた。平坦な底面から緩やかに立ち上がるタイプである。主軸方向は北西方向である。4号土坑は2-2区AY32グリッドに位置する。平面はやや歪な楕円形を呈し、長軸方向が南北を指向する。漸移層上面で確認され、覆土中に休場層上層ブロックが混入するのが特徴である。2・5号土坑は狭い底面を持つ土坑である。2号土坑は2-3区AX35グリッド杭付近に位置する。平面はやや歪な紡錘形を呈し、覆土1層中に縄文土器(82)が出土している。底面が狭いため、断面形は播鉢状を呈する。82は深鉢の口縁部か。大きく内側に湾曲する口縁部で、三角形及び円形の窪みや端部に刻目を入れた隆帯、円形刺突文を伴うモチーフが見られる。また大きく破損して判然としないが、左側の折損部に獣形のモチーフが水煙状に象られていた可能性がある。時期は縄文時代中期代、井戸尻式か。

6~8号土坑は平面が円形を呈するタイプである。6号土坑は4区AY39グリッドに位置し、この土坑から南西約4mの位置に5号土坑が確認されている。計測値は最大径1.15m、深さ0.35mを測る。栗色~富士黒土層上面にて検出している。7・8号土坑は6号土坑より小振りである。前者は2-2区AX32グリッド、後者は同調査区AY33グリッドに位置する。7号土坑は漸移層上面で確認され、計測値



第135図 縄文時代小穴

は最大径0.79m、深さ0.10mである。8号土坑は休場層上層上面で検出され、計測値は最大径0.70m、深さ0.12mを測る。

9・10号土坑は平面形が長楕円～長方形を呈するタイプで、共に壁を直立させている。前者は7-1区B A30グリッドに、後者は7-1区B A29グリッドに位置している。この土坑は2基共漸移層上面で確認されており、計測値では前者は長さ0.92m、幅0.62m、深さ0.46m、後者は長さ1.45m、幅0.80m、深さ0.60mと、10号土坑の方が規模は大きい。また9号土坑の長軸方向が東西を指向するのに対し、10号土坑は南北方向を指向する点で異なる。

11号土坑は底面に小穴を伴う土坑である。2-1区AW36グリッドに位置し、休場層上層上面にて確認された。8号小穴と重複し、時期的に先行する。平面は隅丸長方形を呈し、長さ1.60m、幅0.91m、深さ1.16mを測る。底面中央部に小穴が1基確認される。逆茂木の痕跡か。この土坑の時期は覆土から縄文時代の遺構と考えられるが、住居跡に至近である点から、集落であった時期と違える。

(3) 小穴(第121・135図 第31表)

当該遺跡にて確認された小穴は11基を数える。掘り込みが浅い点から建物等の柱穴と断定できないが、小穴は2～3基程度のまとまりが認められる点が興味深い。1～3号小穴は2-2区A Z31グリッド、4～6号小穴は2-1区AW35グリッド、7・8号小穴はAW36グリッド、9～11号小穴は4区A Y38グリッドに位置している。全て栗色～富士黒土層上面で確認されており、小穴からの遺物は無く、性格は判然としない。

第30表 縄文時代住居跡計測表

報告書遺構名	調査遺構名	グリッド	層位	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	平面形	土壁	石壁	礎	炭化物	計
1号住居跡	SB01	AX-33	FB	7.00	4.44	0.76	円形	206	52	119	14	391
2号住居跡	SB03	AY-36	FB	3.28	2.20	0.10	円形	34	4	4	17	59
3号住居跡	SB04	AY-36	AM	3.48	2.50	0.10	隅丸方形	3		1		4
4号住居跡	SB02	AU-39	FB	4.28	3.10	0.36	楕円形	336	115	228	1	680

第31表 縄文時代土坑・小穴計測表

報告書遺構名	調査遺構名	グリッド	層位	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	土壁	石壁	礎	炭化物	計	備考
1号土坑	SF31	AZ-31	FB	0.96	0.58	0.11						
2号土坑	SF32	AX-35	FB	0.62	0.44	0.38	4				4	
3号土坑	SF33	AY-36	FB	1.31	0.99	0.37						
4号土坑	SF34	AY-32	2M	0.99	0.63	0.28						
5号土坑	SF35	AY-36	FB	0.81	0.51	0.37						
6号土坑	SF36	AY-39	FB	1.15	1.08	0.35						
7号土坑	SF37	AX-32	2M	0.79	0.75	0.10						
8号土坑	SF39	AY-33	VLU	0.70	0.70	0.12						
9号土坑	SF48	BA-30	2M	0.92	0.62	0.46						
10号土坑	SP26	BA-29	2M	1.45	0.80	0.60						
11号土坑	SP08	AW-36	VLU	1.60	0.91	1.16						
1号小穴	SP15	AZ-31	FB	0.32	0.32	0.18						
2号小穴	SP13	AZ-31	FB	0.56	0.42	0.25						
3号小穴	SP14	AZ-31	FB	0.43	0.38	0.25						
4号小穴	SP03	AW-35	FB	0.46	0.46	0.22						
5号小穴	SP04	AW-35	FB	0.34	0.33	0.13						
6号小穴	SP05	AW-35	FB	0.37	0.35	0.26						
7号小穴	SP06	AW-36	FB	0.30	0.30	0.13						
8号小穴	SP07	AW-36	FB	0.34	0.31	0.24						
9号小穴	SP17	AY-36	FB	0.45	0.31	0.18						
10号小穴	SP18	AY-36	FB	0.42	0.39	0.22						
11号小穴	SP19	AY-36	FB	0.34	0.31	0.29						

第32表 縄文時代遺構内出土土器観察表①

遺構名	探出箇所	写真番号	分類	色調(Kue)	文様調整等	撮影	胎土
1号住居跡	5	50	皿	5YR4/4	縁縁状突起、隆帯貼り付け、沈線、縄文、磨り消し、赤影の痕跡	無	白色粒子多、黒色粒子多、石英、雲母
1号住居跡	6	51	皿	7.5YR5/6	縁縁状突起、隆帯貼り付け、沈線、縄文、磨り消し、赤影の痕跡	無	白色粒子多、黒色粒子多、石英、雲母、輝石、白色薄片
1号住居跡	7	50	皿	4.5YR5/6	縁縁状突起、隆帯貼り付け、沈線、三角押文	無	白色粒子、石英、雲母
1号住居跡	8	50	皿	4.5YR4/4	口縁部分にナデ、隆帯貼り付け、磨目文、磨目文、縄文	無	白色粒子、石英、雲母、輝石
1号住居跡	9	51	皿	4.5YR4/6	隆帯貼り付け、磨目文、沈線、縄文、ナデ	無	白色粒子多、黒色粒子多、石英、輝石、白色薄片多
1号住居跡	10	51	皿	4.5YR4/4	隆帯貼り付け、磨目文、ナデ、内外面にナデ	無	白色粒子多、石英、雲母、白色薄片
1号住居跡	11	51	皿	4.5YR4/4	隆帯貼り付け、磨目文、黒方肉の縄文	無	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色薄片
1号住居跡	12	51	皿	5.0YR5/4	黒方肉の縄文	無	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色薄片
1号住居跡	13	51	V	1.0YR3/1	隆帯貼り付け、黒色沈線、内面にナデ	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色薄片
1号住居跡	14	51	V	5YR5/6	隆帯貼り付け、磨目文、黒色沈線	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色薄片

第32表 縄文時代遺構内出土土器観察表②

遺構名	探検番号	写真図番	分類	色相(hue)	文様調音等	撮影	胎土	
1号住居跡	15	V	1	5YR5/6	隆帯貼り付け、割目文、集合沈線、内面にナデ。	無	白色粘子、黒色粘子、石英、雲母、輝石、白色薄片	
1号住居跡	16	V	1	2.5YR5/6	無文、内外面にナデ。	無	白色粘子多、黒色粘子多、石英、輝石、白色薄片多	
1号住居跡	17	51	2	10YR5/4	隆帯貼り付け。棒状工具による割痕、内面にナデ。	無	白色粘子、黒色粘子、石英、輝石、白色薄片	
1号住居跡	18	51	Ⅲ	7.5YR5/2	土製円錐、磨盤状工具による条痕、内面に隆帯。	無	白色粘子、黒色粘子、石英、輝石、白色薄片	
1号住居跡	19	51	Ⅳ	7.5YR5/6	動物の頭部の土器磨盤部、隆帯貼り付け。	無	白色粘子、黒色粘子多、輝石多	
2号住居跡	29	52	Ⅲ	7.5YR4/4	口唇部以下に細い隆帯貼り付け、割目文、キョウビラウ文、三叉文、波状文、縄文。	無	白色粘子多、黒色粘子、石英、雲母、白色岩片、岩片	
2号住居跡	30	Ⅲ	5	7.5YR5/4	口唇部に爪痕文、三角押文。	無	白色粘子、黒色粘子、石英、輝石、白色薄片	
2号住居跡	31	52	Ⅲ	7.5YR5/4	溝状突起、隆帯貼り付け、口唇部に爪痕文、爪痕文と割痕、(ハネル文)	無	白色粘子多、黒色粘子、石英、雲母	
3号住居跡	34	Ⅲ	4	7.5YR5/3	縄文。	無	白色粘子、黒色粘子、石英、雲母、輝石、白色薄片	
4号住居跡	35	53	1	7.5YR5/4	縦位の横内文。	無	白色粘子、黒色粘子、雲母多	
4号住居跡	36	53	1	5YR5/2	内面に条痕。	有	白色粘子、黒色粘子、石英、輝石、白色薄片	
4号住居跡	37	53	1	5YR5/6	内面に条痕。	有	白色粘子、黒色粘子、石英、輝石、白色薄片	
4号住居跡	38	53	Ⅲ	5YR4/3	半縦竹管状工具による沈線、割突、三角押文、キョウビラウ文。	無	白色粘子、黒色粘子、石英、輝石、白色薄片	
4号住居跡	39	53	Ⅲ	7.5YR5/4	溝状突起、隆帯貼り付け、穿孔、キョウビラウ文、三角押文。	無	白色粘子多、黒色粘子多、石英、雲母、輝石、白色岩片	
4号住居跡	40	53	Ⅲ	7.5YR4/2	沈線、三角押文。	無	白色粘子多、黒色粘子、石英、輝石、白色岩片	
4号住居跡	41	53	Ⅲ	5YR0/1	口唇部直下に縄文、キョウビラウ文、半縦竹管状工具による割突	無	白色粘子多、黒色粘子、石英、雲母、輝石、白色岩片	
4号住居跡	42	53	Ⅲ	7.5YR4/6	半縦竹管状工具による平行沈線、磨り消し、内面にナデ。	無	白色粘子、黒色粘子、石英、雲母、輝石、白色薄片	
4号住居跡	43	53	Ⅲ	7.5YR4/4	半縦竹管状工具による沈線、波状文、縄文、内面にナデ。	無	白色粘子、黒色粘子、石英、雲母、輝石、白色薄片	
4号住居跡	44	53	Ⅲ	5YR4/6	筒縁貼り付け、割目文、半縦竹管状工具による縦線状の沈線、キョウビラウ文、三角押文、三叉文、内面にナデ。	無	白色粘子、黒色粘子、石英、雲母、輝石、白色薄片	
4号住居跡	45	53	Ⅲ	7.5YR5/6	半縦竹管状工具による隆帯状の沈線、キョウビラウ文、三角押文、三叉文、内面にナデ。	無	白色粘子多、黒色粘子、石英、輝石、白色岩片	
4号住居跡	46	53	Ⅲ	7.5YR4/4	隆帯貼り付け、キョウビラウ文、波状文、縄文。	無	白色粘子、黒色粘子、石英、雲母、輝石、白色薄片	
4号住居跡	47	53	Ⅲ	5YR5/6	隆帯貼り付け、キョウビラウ文、三角押文、縄文。	無	白色粘子、黒色粘子、石英、雲母、輝石、白色薄片	
4号住居跡	48	53	Ⅲ	5YR4/6	隆帯貼り付け、キョウビラウ文と三叉文、割目文。	無	白色粘子、黒色粘子、石英、輝石、白色薄片	
4号住居跡	49	53	Ⅲ	5YR4/6	隆帯貼り付け、キョウビラウ文と三角押文。	無	白色粘子、黒色粘子、石英、雲母、輝石、白色薄片	
4号住居跡	50	53	Ⅲ	5YR4/6	隆帯・筒縁貼り付け、三角押文、棒状工具による押引き。	無	白色粘子多、黒色粘子、石英、雲母、輝石、白色岩片	
4号住居跡	51	53	Ⅲ	5YR5/6	隆帯貼り付け、キョウビラウ文、三角押文。	無	白色粘子、黒色粘子、石英、雲母、輝石、白色薄片	
4号住居跡	52	53	Ⅲ	7.5YR4/6	隆帯貼り付け、三角押文、縄文。	無	白色粘子、黒色粘子、石英、雲母、輝石、白色薄片	
4号住居跡	53	53	Ⅲ	7.5YR5/4	隆帯貼り付け、半縦竹管状工具による沈線、キョウビラウ文。	無	白色粘子、黒色粘子、石英、雲母、輝石、白色薄片多	
4号住居跡	54	53	Ⅲ	7.5YR5/4/4	沈線、押引き。	無	白色粘子、黒色粘子、石英、雲母、輝石、白色薄片	
4号住居跡	55	53	Ⅲ	5YR4/6	沈線、縄文、指頭痕。	無	白色粘子、黒色粘子、石英、輝石、白色薄片	
4号住居跡	56	53	Ⅲ	5YR4/3	半縦竹管状工具による沈線、縄文、磨り消し、内面にナデ。	無	白色粘子、黒色粘子、石英、雲母、輝石、白色薄片	
4号住居跡	57	Ⅲ	3	5YR5/6	キョウビラウ文、三角押文、縄文。	無	白色粘子、雲母、輝石、白色薄片	
4号住居跡	58	Ⅲ	3	7.5YR5/4	指頭痕、内面にナデ。	無	白色粘子、雲母、輝石、白色薄片	
4号住居跡	59	53	Ⅳ	7.5YR7/3	口唇部に半縦竹管状工具による押引き、平行沈線、割突、内面に指頭痕。	無	白色粘子、黒色粘子、石英、輝石、白色薄片	
4号住居跡	60	53	V	3	5YR4/4	筒縁貼り付け、ナデ。	無	白色粘子、黒色粘子、石英、輝石、白色薄片
4号住居跡	61	Ⅳ	1	7.5YR5/4	縄文の頭部、磨盤、内面にナデ。	有	白色粘子、黒色粘子、石英、雲母、輝石、白色薄片	
4号住居跡	62	Ⅳ	1	7.5YR5/6	無文の頭部、磨盤、内面にナデ。	有	白色粘子、黒色粘子、石英、輝石、白色薄片	
4号住居跡	63	Ⅳ	1	5YR4/4	土製円錐、ナデ。	有	白色粘子、黒色粘子、石英、輝石、白色薄片	
4号住居跡	64	Ⅳ	1	5YR4/4	土製円錐。	有	白色粘子、黒色粘子、石英、輝石、白色薄片	
2号土坑	82	54	Ⅳ	5YR5/4	隆帯貼り付け、割目文、円形割突、沈線。	無	白色粘子、黒色粘子、石英、雲母	

第33表 縄文時代遺構内出土石器計測表

遺構名	探検番号	写真図番	遺物番号	グリッド	群種	石材	測定産地	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
1号住居跡	20	51	2710	AX-33	打製石斧	中粒砂岩		10.3	6.5	2.4	172.2
1号住居跡	21	51	2480	AX-33	打製石斧	角閃石安山岩		8.6	4.5	2.3	96.5
1号住居跡	22	51	2600	AX-33	二次加工削片	風硬石	神津島豊島島	(2.5)	2.3	0.5	2.6
1号住居跡	23	51	3273	AX-33	磨盤石	玄武岩		15.1	8.1	5.6	1319.3
1号住居跡	24	51	3272	AX-33	磨盤石	玄武岩		9.5	6.4	5.5	426.9
1号住居跡	25	51	3153	AX-33	磨盤石	輝石安山岩	(5.6)	8.4	4.5	5.6	297.2
1号住居跡	26	51	3268	AX-33	磨石	輝石安山岩		13.3	11.0	6.4	1365.4
1号住居跡	27	51	3247	AX-33	磨石	玄武岩		7.0	5.9	4.7	296.5
1号住居跡	28	51	3266	AX-33	磨石	輝石安山岩	(6.8)	4.8	4.6	182.2	
2号住居跡	32	52	1870	AY-36	打製石斧	ホルンフェルス		7.4	5.6	1.9	101.9
2号住居跡	33	52	1096	AY-36	磨盤石	多孔質玄武岩		13.3	8.2	4.8	659.3
4号住居跡	65	54	1418	AU-39	尖頭器	ホルンフェルス		(4.3)	2.3	1.2	11.7
4号住居跡	66	54	2130	AU-39	石錐	ガラス質黒色安山岩		1.6	1.2	0.3	0.4
4号住居跡	67	54	2132	AU-39	石錐	風硬石		2.9	1.7	0.6	2.1
4号住居跡	68	54	874	AD-39	石錐	ホルンフェルス		2.3	1.3	0.4	1.3
4号住居跡	69	54	1766	AD-39	磨石	風硬石	神津島豊島島	2.0	1.0	0.5	1.0
4号住居跡	70	54	879	AD-39	磨石	風硬石	神津島豊島島	1.9	1.3	0.7	1.3
4号住居跡	71	54	872	AD-39	磨石	風硬石	神津島豊島島	1.7	1.0	0.9	1.4
4号住居跡	72	54	878	AT-39	打製石斧	ホルンフェルス	(6.5)	5.3	2.0	83.4	
4号住居跡	73	54	1815	AU-39	打製石斧	網走安山岩	(6.4)	4.7	10.6	25.8	
4号住居跡	74	54	1739	AU-39	打製石斧	緑色片岩	(7.0)	5.8	1.4	124.8	
4号住居跡	75	54	1945	AT-39	打製石斧	ホルンフェルス	(12.0)	6.1	2.2	106.3	
4号住居跡	76	54	1849	AU-39	打製石斧	白雲母片岩	(6.4)	3.2	0.8	21.4	
4号住居跡	77	54	875	AU-39	打製石斧	緑色片岩	(8.0)	6.3	2.1	143.4	
4号住居跡	78	54	1946	AT-39	磨盤石	玄武岩		13.9	9.0	5.6	988.4
4号住居跡	79	54	793	AT-39	磨石	中粒砂岩		5.9	4.7	2.8	102.9
4号住居跡	80	54	1949	AT-39	磨石	輝石安山岩		10.7	5.9	3.6	310.5
4号住居跡	81	54	1830	AU-39	磨石	玄武岩		10.8	12.9	60.0	1179.1